

自元文四年
至延享元年

毛利十一代史

第二十五册

觀光公記

毛利十一代史卷之六十二

大田報助編

觀光公記五

元文四年己未正月公萩城ニ在リ

十九日兵書吉田十郎左衛門多數ノ子弟指南シ去々年去年明倫館皆勤ニヨリ銀二枚
下付

廿日毛利大藏家ニ一書三星ノ紋章付ケ來リタル事由當職堅田安房へ陳述セシモ記
乗確證ナキ爲メ要領ヲ得ス因テ公開ニ達シ公ノ意旨ヲ記載シテ安房ヨリ大藏へ傳
達セリ元文三年二月ヨリ同四年二月迄諸事小々控

此間御内々被仰聞候趣私承置候由御挨拶も難仕候付御内々にて 上え申上候處
に私え被成 御意候趣則書付置申候其趣は大藏家の儀は元康以來他之家を繼候
と申儀無之故家之紋と申事無之由左候は、先祖當家の紋を付候事も可有之候其

明治
43.10.26
寄贈

段は大藏家に不限元就様以前御家別れ之家筋福原其外大小身共に有之當家之紋
之外格別に家之紋無之儀候間先祖は當家之紋を付たる家も可有之儀夫故歟一に
三星を形とり大きに其形を替付候様に被逮御覽候大藏家に青雲院様御代申上澤
瀉を付候とても丸に立澤瀉にては形替りたる事候然處に幕計にても一に三星を
其儘付候事容易に難被差免儀と被思召候大藏家え差免候ては殘る四人の一門中
縦他家を繼其家之紋有之候ても一門と候て仕成も相立候事は家別れ故と相見第
一毛利稱號名乗せ候上は孰も家之紋に相副一に三星を付度と申候時不差免様に
も不相成候尤大藏事先年下の關上關其後徳山など出役之節幕之紋に一に三星並
定紋を交へ付候由縦左様之儀有之候ても其節之留控等も無之事に候へは此度御
吟味之筋にも不相成儀と被思召候惣而此等之儀に不限年久敷中絶と相見候儀差
免候様には不相成事に候第一大藏方にて右之斷有之候は、御代々之内可申上時
節も可有之儀既、御先代初御入國御供御家督無御間相と候ても差控打過候儀當
御代に至り被差免候やうには不被爲成との 御意にて御座候右之通私え被遊

御意候其上いまた御年若之儀此御時節かやう之儀被仰上候ては 上之御爲次に
御自分様御爲に付候ても不宜儀御座候間此旨御内話之趣をも不被仰下以前に被
成御心得候様にと存候

同日赤川忠右衛門ニ山口代官ヲ熊毛郡代官木梨彌右衛門ニ山代代官ヲ長沼作右衛
門ニ熊毛郡代官ヲ命ス

廿一日伊勢大神宮吾藩祝詞師村山若狭ヨリ元就公安藝ニ於テ神領寄付輝元公長州
移封後神領米納付以來深重ノ由緒アルヲ以テ銀十五貫目貸與ノ乞願ニヨリ金五十
兩交付セラレ

廿八日根來主馬ニ日野七兵衛替大組頭ヲ命ス

二月十五日益田織部當職在勤中防長兩國收入享保五七月ヨリ同七六月迄支出共計
算一紙左ノ如シ

一惣高九十一萬千二百六十八石一斗七升

此内三十八石三斗六升 新開

右之物成

米三十二萬三千八百八十一石四升

銀一萬七千二百四十六貫九百十匁

内拂

米十九萬九千七百四十石九斗八升

銀一萬四百五十三貫百六十四匁

殘

米十二萬三千四百六十六石六升

銀六千七百九十三貫三百四十六匁

右貸付米銀共後任當職浦圖書へ交付

織部生存セシトキハ料理ヲ賜ヒ一枚五兩ノ脇差下付セラルヘキモ死亡ニツキ嫡

子河内へ褒詞アリ上勘頭取佐藤七郎左衛門厚母惣左衛門ニ各銀一枚下付

十七日目付役桂久右衛門夜中郎門外出ノトキ大番山中市左衛門ト同伴無切手ニテ

通門セシニヨリ職務ヲ免シ逼塞ヲ命ス

廿日開作地ニ關シ老臣ヨリ訓令發布セリ

覺

一前々御断之筋有之候へは御沙汰之上開作地拜領被仰付候へ共於于今は山野海邊共新田島に可相成土地之餘計も無之百姓共田島開替否起等之便も不宜否起之妨にも罷成候様に被開召候依之自今開作地之儀は下より御断之筋を以は拜領被仰付間敷との御事

一山野海邊共に百姓とも開替自力開作にも難成所柄之内新田島に可相成少々餘計之土地も有之候は、御代官役兼而令見分凡之町敷を見立地下支りも無之は、可申出候御僉議之上開立被仰付にて可有之候事

一右之通就被仰出候開作地之儀に付前々より之趣令讓談候處知行物切之儀は前々被差免候間自今も可被差免候然共下地之石高…不相應之町敷申出候は、能々御僉議之上趣によつて被差免にて可有之候事

一二歩戻り開作之儀被遂御許容來候間申出候は、御沙汰之上可被差免候事
 一前方開作地町敷拜領被仰付未所柄不申出面々有之自今申出候は、御檢議之上
 御用地に不相支所之分は被差免にて可有之候事
 右之趣を以自今無相違可令沙汰旨候事

元文四年未二月

堅	安	房
山	縫	殿
毛	宇	右衛門
毛	大	藏
毛	筑	後

廿二日當職山内縫殿へ黒印令條ヲ授ク左ノ如シ

申聞條々

一國中仕置之儀彌其方え申付候間諸事先規之通無用捨可有其沙汰候自然不及分
 別儀於有之は加判並休息之老共えも可相談事

一天下御法度之旨市中在々至迄堅可申付候尤御物送其外御用之儀津々浦々何も
 無緩様に入念可申付事

附キリシタン宗門窮之儀不怠穿鑿可仕事

一國中之輩別而困窮之事候間無油斷可有心遣候尤無體之儀不申懸且爲能様可令
 沙汰之通諸所に付置候役人共えも能々可申聞事

一耕作之儀時節無油斷不作損亡等無之様に諸代官中え入念可申付事

一國中自然凶年之時飢人爲救米穀貯之儀其方令吟味申付候趣聽届候此儀國政肝
 要之事候間仕法之通後年以申傳彌成立候様可有其沙汰候然は成就之上其内に
 ても飢歲之救に用候は、二三年迄之間如最前返し澄且 公儀に付重き國用相
 達候儀は可爲各別於然は其年翌年迄之内先石無相違返納之沙汰怠有間敷候此
 外尋常之儀には暫借たりとも取用候儀堅無用に候此段役人共えも入念可申聞
 置事

一藏本兩人役之者諸事之沙汰肝要候間此段克々可申聞事

一諸役人勤之善惡有之而或加褒美或行罪科輩之儀其意趣具可言上候差向儀に於ては各相談之上如何體にも申付追而其趣可有言上事

附少々之儀は諸事其方校了を以沙汰仕其段も追而可申越事

右之旨を以可沙汰者也

元文四年二月廿二日 御 黒 印

山内 縫殿とのへ

備考黒印令條中凶年のとき飢人救之爲め米穀貯之條項は山内縫殿上申に因り加入せらる又向後當職への黒印令條中寶藏銀に關したる一條を挿入するに決し元文五年十二月當職山内縫殿より江戸當役板本彈正へ協議し縫殿意見の如く命令あり

同日根來主馬前年故アリ領地沒收浮米ニ替へ給與ナリシニ目下家臣ヲ住居セシムル土地ナク軍役ノ準備ヲ缺クニヨリ地下付ノ乞願ヲ許シ家祿之内千石下地ヲ以テ付與セラル

廿三日文武^ツ方吉屋源右衛門佐藤藤右衛門新庄七兵衛諸臣ヲ教授シタルニヨリ各銀五枚ヲ賜ヒ將來ヲ勵マヌ

廿五日國內立山ニ關シ地方老臣ヨリ意見書提出左ノ如シ

御國中御立山不荒様に守護申付候儀は前々より之儀就中海上見入之處念を入山立候様に沙汰可仕之由御先代御船中にて被成 御意其沙汰仕候得共其後格別之儀も無御座候依之海上見入之所は不及申其外共に植松實植等之儀も致其沙汰惣而山成立之吟味申付候然處御所帶地道之御不足且年々臨時之御入用有之段も前々より之儀にて兎角御差問に相成儀に付 御先々代佐世主殿當役所勤之内二十番山と名付け御國中之御立山二十年に一度宛順番に採用御拂に仕候積りも有之たる由に御座候凡二十年程相立候得は最前之通に成立候考を以右之趣と相聞候自今も其吟味有之度儀と存御國中之御立山廣狹之畝反木數木之大小共に相改申出候様にと御代官中へ申付候得共山數^由付而未改之趣不申出候御留守に相成御代官中より可申出候間其趣を以先々迄之儀をも致吟味差向當年之儀江戸御増

送御國臨時之入用も餘分之儀にて差問申儀に御座候間一山二山にても見入旁支りに不相成處採用賣拂申付少々にても御不足之償に可仕と存候此段御聞置思召寄次第 御内聞に被及被置候様にと存候

同日明倫館寄宿生ニ關シ老臣訓示左ノ如シ

一明倫館諸生十五人館中入込年限明次第逐々入込之願仕人柄之内付食にて入館仕度由相願候者別而學問志有之者にて無之候得は其願不仕筈之儀と相聞候其上付食之儀多くは諸士之嫡子と相聞候へは強而學問不令上達候ても入館程之身分得徳には罷成先々御役所勤之心得にも可罷成事に候御養諸生之儀多くは諸士二男三男其外浪人者之柄相願申と相聞候間學問之器用抽候而餘程相見候人柄にて無之候は、入館之沙汰可爲無用候事
一御養ひ諸生之儀は鹽増代共に二人扶持宛之引當有之儀に候然は右にも有之通付食諸生之儀は多是諸士之嫡子別而其志有之もの相願申と相聞候然は御養ひ諸生十人之内役付五人を引殘五人之儀は館中賄之不勝手無候は、鹽増代一人

分之引當を付食諸生鹽増二人分に仕入館之諸生相増候分は勝手次第に被仰付候事右之通可有沙汰候以上

元文四二月

堅 安 房

山 縫 殿

内藤與三左衛門殿手同頭にて明倫館
熊谷 帶 刀 殿所管

廿八日文武諸藝獎勵ニ關シ訓令左ノ如シ

文學諸武藝之事は諸士として不致稽古して不叶儀に付 御先代御思召之旨を以明倫館造立をも被仰付候就中文學之儀は萬事之心得にも可罷成事候へは大身寄組以上之面々別而其心懸可有之儀と被思召候上にも不絶講釋等被聞召儀候間寄組などの儀は役付とても御番等繁々にも無之ケ様之儀老若に不依儀に候へとも別而四十歳にも不及面々本人嫡子共御役目同前程に相心得無據障り無之候は、可成程は講釋日不怠様にも心懸可然との御事候且八組頭中之儀も御番月之外組

内御用之隙に不相成様に申談折々にても罷出講釋をも承諸稽古をも見分有之候は、御家來中稽古之勵にも罷成儀被思召候

一弓馬兵法は武家之要樞也御家來中其修練勿論之事候就中壯年以下之輩不怠様にと被思召候且花火風流を次にし質素を本とし山野路程之達者無之候ては治亂共其役儀に依而難達事候條是以其心得可有之儀と被思召候

右之趣當役中え被成御意候付爲御心得相達候尤御留守中面着をも被仰付にて可有之候

同日高須平之允書院小性役十八年勤務ニヨリ遣小袖下付

日不詳東光寺住職仰岩去々年入院開堂今回尋テ結制式舉行之乞願ヲ許シ銀百枚納付セラル

日不詳諸臣義絶ノ輩ニ於ケル和解ニ關シ協議書左ノ如シ

近來御家來中義絶之衆間々有之就中寄組中其儀多有之由相聞候元來親戚又は朋友半間にても義絶に及候儀は至て重き儀可成程は夫迄に不逮やうに有之度儀に

候へ共追々其儀多有之段は當時之風俗是亦 事輒儀之様相成候歟と相聞自今共に其儀多有之候ては 御爲にもいか敷尤品に依て其家父祖之心にも難叶御役目御奉公之支りにも可能成事と相見候縱至極之譯にて不得止一旦及義絶候とも公私懸其分にて被打過候ては 上之御思召に於てもいか、に可有之候間取持之筋も有之候は、其品に應し相互に憤を被差捨平和之心得可然候

一右之通當役中存寄之口上書相調寄組月番和智右近並 御城居懸り之儀候間粟屋勘兵衛寺社奉行兩人内相加安房縫殿相對仕申聞せ寄組中え得と相達候様に仕にて有可御座候

一右之口上書寄組中え得と相達申候上にて上山庄左衛門兒玉市之助島尾五郎右衛門長沼九郎右衛門四人之内兩人程佐世雅樂方 寄組中と双方え對し平和之取持仕候様に當役中より内々差圖仕にて可有御座候

一佐々木三郎左衛門方之義絶事兒玉五左衛門取持懸と相聞候間佐世方と寄組中之間え取持衆致差圖候譯五左衛門え爲心得知せ候様仕にて可有御座候

一右之通當役中より寄組中へ存寄之口上書をは向後え懸け下之心得にも相成可然候間當役中より寄組中えケ様之存寄相達候譯手回組八組支配々々に知せ置候様にとの儀に候由遠近方より證人々々え相知置候様仕にて可有御座候

三月二日公萩發途

四月三日公着府十五日登營將軍不例大納言ニ謁ス

七日毛利讃岐守着府

十九日東叡山火防ヲ命セラル

同日吉川左京室父中條大和守死去ニツキ萩ヨリ岩國へ使ヲシテ弔書ヲ贈ラル

廿一日飯田六郎兵衛ニ宇田川夫人裏老ヲ命ス

廿二日公尾張宰相家督後初ヲ訪問太刀馬代ヲ遣ラル

廿六日供徒士河村九市郎發狂自殺嗣子ナキヨリ給米沒收

廿七日長壽夫人裏老村上又右衛門病死ス

五月二日江戸留守居榎本彈正歸國ニツキ召下羽織金五十兩下付金貨給與ハ兩度留

守居役任命夫人婚姻ニ先チ出府營膳等多端ノ勤勞アルニ因テ也

七日毛利讃岐守駿府加番任命ニ因リ合力ノ請求アリ鹽饒トシテ金二百兩外鞍置馬五匹料金八十兩進セラル

十日村上五郎兵衛病死ス跡職ハ末期ノ法ヲ以テ病中假養子末家村上彦左衛門持掛知行高四十三石沒收五郎兵衛知行高三百五十石之内高百五十石減少殘高二百石彦左衛門へ下付相續ヲ命ス

十二日伊藤市右衛門栗屋市兵衛藏元米方勤務中諸郡ヨリ收納米計算遷延セシメタルハ緩怠ニヨリ逼塞ヲ命ス其他關係人處罰アリ

十五日毛利岩之允五節月次登營スヘキ許可アリ

六月八日蠻船陸奥及安房洋中ニ泛フ令文左ノ如シ大目付同狀

一當五月下旬奥州邊房州筋海上に異國船相見候由陸へ揚候は、おさへ置注進可有之旨可申渡置候捕候刻逃去候分は其分に致し一兩人留置候得ても不苦候間可存其越候

右之趣濱方有之御代官共並御預所へも申渡候間領分に海邊有之面々も可被存此旨候

十五日尾張宰相入部ヲ祝シ尾州へ使ヲ遣シ祝品ヲ贈ラル
十七日林小左衛門ニ目付役ヲ命ス

廿九日毛利岩之允室ニ立花飛騨守貞俣女ヲ娶ル可キ許命アリ

晦日玉川上水薩摩小路組合樋朽損修築ニヨリ出銀割方左ノ如シ

高三十六萬九千四百一十一石

銀三十四貫四百四十六匁三分三厘八毛

此金五百七十四兩と銀十一匁三分三厘八毛二絲

七月五日宇田川夫人被官來原久左衛門逃亡ニヨリ給米沒收

十二日門田長左衛門發狂自殺跡職先格ヲ以テ高百石之内二十二石減少殘高七十八

石嫡子左中へ下付家續ヲ命ス

廿二日右筆赤川又左衛門死去

廿四日當職右筆羽仁五郎左衛門ニ當役右筆副役ヲ命ス

八月二日玉川上水ノ事今ヨリ後町奉行ノ所管トス奉行支遣ハ道 徳川十五代史

五日吉川左京參府十二月五日歸邑

七日當役堅田安房長府家老三澤帶刀ヲ招キ長府家秀元君以來菊ノ紋章付ケラル、

ハ何レヨリ拜受セラレシヤ質問セシニ帶刀記臆ニ存セス要領ヲ得サルニヨリ詮考

ヲ經テ申報スヘシト演達シ安房公ノ意旨ヲ傳ル左ノ如シ元文四年同五年諸事小々之控

大膳様被仰候者 岩之允様御事菊之御紋御付被成候様に被及御覽候菊の御紋之

儀は 禁裏之御紋にて候故此御方御代々共に御付被成候儀無之と相見拜領仕候

者も無之外にても菊之御紋御付被成候御方御見及も不被成候此已後菊之御紋は

御用捨被遊可然被思召候此段申達候様にと被仰候

右之傳達書ニ對シ長府ヨリ報答ヲ得サルニヨリ元文五年四月八日安房ヨリ公儀人

ヲシテ三澤帶刀ニ督促セシメタルニ答申左ノ如シ

覺

天正十八年七月中旬 宮松丸様於て 禁中御元服被仰付被任右京大夫其時菊桐之御紋被蒙 勅許候由尤從 秀吉公秀之御字御拜領にて秀元公と被爲名乗候由申傳候付而代々當甲斐守殿迄菊桐之紋被付來候右之舊記等之儀は明曆三正月十九日久保町屋鋪類焼之節焼失仕候以上

覺

天正十八年七月中旬宮松丸様於 禁中御元服被仰付被任右京大夫其時菊桐之御紋被蒙勅許候由尤從 秀吉公秀之御字御拜領にて秀元公と被爲名乗候由申傳候付御代々當甲斐守様迄菊桐之御紋御付來被成候右舊記等之儀は明曆三正月十九日久保町御屋敷類焼之節致焼失候由御覺書之趣小笠原仁左衛門え御演說之趣旁致承知 大膳様へ申上候處 秀元様菊桐之御紋御拜領被成候付其御手筋を以御代々被用來候段左様も可有之儀と被思召候然處御本家にて菊桐之御紋御拜領之儀其御由緒曆然之儀依之桐之御紋之儀は御代々被相用候へ共菊之御紋之儀は於

禁裏も桐より重き御紋にて候哉此御方御代々御幕御衣服等にも御付不被成候於諸家 禁裏御紋御拜領之家筋も有之と相聞候へ共常々菊之御紋を御衣服杯に御付被成候様には御見及不被成候第一右之通菊之御紋之儀は御本家にも御用捨被成候間甲斐守様御爲に付候ても菊之御紋御付被成候儀は御用捨被成可然儀と被思召候

四月廿七日長府留守居迫田茂右衛門參郎左の覺書を提出す是に於て菊紋章制止の解決を告るに至れり

口上覺

甲斐守殿菊之紋所被付候趣に付委細御書付を以被仰聞せ候段御書付則甲斐守殿え入披見候菊之御紋所之儀は 御本家様にも御用捨被成候間甲斐守殿爲に付菊之紋所被付候儀は用捨被仕可然と 大膳様被思召候旨委細被致承知被奉得其意候以上

四月廿七日

十五日赤川忠右衛門ニ目付役ヲ命ス

十九日柿並半右衛門ニ羽仁五郎左衛門替當職右筆ヲ命ス

廿二日養心院夫人室吉廣公京都三條留邸ニ没セララル年四十八船岡山ニ火葬シ遂ニ遺

骨ヲ萩大照院ニ納メラル九月廿二日京ヲ發シ十月廿二日萩ニ至ル

廿四日供徒士中村九郎左衛門橋本川ニ於テ水練修業中溺死セリ嗣子ナキモ水練公

開場ニ於テ死亡セシニヨリ末期ノ法ニ據ラス跡職舊ノ如ク命セララル

廿五日鷺頭小右衛門ニ山口代官ヲ命ス

廿七日右筆副役羽仁五郎左衛門ニ右筆本役ヲ命ス

同日春日大宮司波多野宮内吉田三位家督祝禮及嫡子藤九郎繼目申請ノ爲メ上京中

多額ノ負債ヲ爲シ且兩國社家ヨリ吉田へ祝金收集シ吉田へ納付ヲ終ヘス其罪輕カ

ラサルニヨリ遠流ニ處ス

舊記曰是時波多野宮内より由緒書三冊世代付一冊差出見合候處當宮内より七代

已前の祖波多野右衛門大夫より神職被仰付元就公以來段々ノ御判物等有之其外

奉書等之類數十通所持仕居神職由緒有之家筋に御座候云々

此月令ス徳川十五代史

一浦賀入津之回船へ異國船之儀見懸候哉否相尋候儀先達而相達候之通來月より

は不及其儀に候併し以來も海上等にて異國船其外怪敷舟見懸候は、申出候様

に可被申付置候

九月二日利根姫君松平陸奥守 越前守 慶中安産諸大名惣出仕公忌服中登營ナシ

五日美彌郡前代官草刈庄兵衛問屋横屋伊右衛門ナルモノ收納米銀及人民へ下付米

引負逃亡セシ爲メ上下多額ノ損害ヲ受ケタルハ庄兵衛職務緩怠ノ致ス所ニツキ逼

塞ヲ命シ家祿十分一減少

十二日神保孫右衛門養心院夫人法號京都ヨリ守護歸國ニツキ金二百匹下付

廿一日本年四月二十二日銅山ニ關シ勘定所ヨリ回牒アリ依テ提出書左ノ如シ四元未

同申公
儀事控

口上

銅山之儀に付先頃以御書付被仰渡候通國元申遣役人共吟味申付此度左之通申越候
一長門國之内銅山問堀場所四ヶ所

内

一ヶ所 阿武郡川上村之内長谷六郎ヶ谷

但請負長崎御用支配所宮佐左衛門代守田平四郎去夏より當分打捨

一ヶ所 美禰郡長登村之内白山

一ヶ所 同郡太田村之内坂福

但二ヶ所請負京都錢座有來清助當時問堀之分

一ヶ所 同郡綾木村之内大平

但請負長崎柏本治兵衛當時問堀之分

一周防國之内銅山問堀場所二ヶ所

内

一ヶ所 都濃郡鹿野村之内大潮

但請負長崎守田平四郎當二月より當分打捨

一ヶ所 玖珂郡山代本郷村之内添谷

但請負大坂和田喜兵衛去午の年より當分打捨

右唯今請負山稼仕候へ共或水強水抜之方便不相成又は仕入銀届兼當分打捨候も有之當時問堀仕候分も續候而銅出方之儀相見不申候尤少々宛鉛石掘出し又は燒釜え懸け候分も有之候追而出銅相續銅員數も相極候は、其節可申上候以上

松平大膳大夫内

九月廿一日

小笠原仁左衛門

廿五日重陽時服及利根姫君安産七夜祝品公忌服ノ爲メ延期ナリシニ二十二日忌明ニツキ是日將軍父子へ重陽小袖一宛七夜祝品小袖二宛献セラル
十月五日本年八月五日ヨリ六日ニ至ル國內暴風雨洪水田畑損害高一萬九千四百六十石餘家屋流殺千八百七十二戸倉庫大小百十七戸橋流失九十三廻船獵船五十二艘死牛馬六頭幕府ニ上陳セラル長府領田畑損害高四千百三十九石四斗九升餘落橋三

十八所山崩四百二十七所潰家百十七戸徳山領田畑損害高一萬六千二百九十四石餘潰家三十戸破船六艘ナリ

十二日ヨリ十三日ニ至ル青雲公三十三回忌青松寺ニ於テ法會修セラレ米二十俵銀十五枚納付十一日ヨリ十三日ニ至ル大照院ニ於テ法華三百部修セラレ

十八日城代役益田源兵衛死ス日野七兵衛ニ後任ヲ命ス

廿九日曩ニ改正服忌令公布不審ノ事項アラハ質問書提出スヘキ旨松平安藝守ヨリ回牒到ル因テ明倫館講師津田忠助ニ命シ質問書調成寛保二年之春大目付ヘ提出セラレシニ同三年正月十九日質問書ニ付箋シテ交付アリ

十一月朔日竹千代君將軍嫡孫髮置アリ二日諸大名惣出仕竹千代君ヘ二種一荷將軍父子ヘ二種一荷宛献セラレ

十一日公儀人兼重五郎兵衛ニ長壽夫人衰老ヲ命シ曾禰吉左衛門ト交代セシム

十四日戸川内膳屋敷發火ノトキ吾藩ヨリ三町火消トシテ派出セラレタル萩原六兵衛石津新八消防ニ盡力シ他ニ延焼セシメサルヲ賞シ各金二百匹閑老ヨリ交付アリ

十五日志道太郎左衛門君夫人着帶祝使トシテ出府ニツキ金五百匹下付

十六日萩城三郭溝渠北之濱ヘ新堀開通ニツキ幕府ヘ伺書左ノ如シ

長門國萩之城三之曲輪之堀城下爲諸用常々小船通路之堀筋御座候然處諸所之下水流入其上毎々洪水之節埋候付享保八年九月以繪圖相窺候處に不絶浚可申付候由被仰出追々浚候得共埋強御座候付當夏以來も段々浚申付候然共北之方堀水吐無御座候付埋安大雨之節は近邊町家え溢迷惑仕候依之吟味仕候處爲水抜別紙繪圖之通幅三間之溝北之濱え堀抜申候は水吐能埋も疎に可有御座と相見候付奉願候以上

元文四己未年十一月十六日

松平大膳大夫

繪圖え之御書付左之通

長門國萩城

右三之曲輪之堀諸所之下水流入其上洪水之節埋候付享保八年九月奉伺不絶浚申付候得共水吐無之候故埋強其上大雨之節は堀之水近邊之町家え溢候付爲水抜北

之濱海手え朱引之通新規溝ヲ掘抜水吐候様に仕度奉願候以上

元文四己未年十一月

松平大膳大夫

右之請願ニ對シ十二月二十九日閣老認可書ヲ授ク新堀開通ニ關シ盡力者へ賞與

左ノ如シ

時服二

町奉行 島尾五郎右衛門

時服一 銀三枚

作事奉行 生田猪右衛門

時服一

作事檢使 坪井彌左衛門

廿八日毛利岩之允前髪ヲ執ル

十二月十六日毛利岩之允從五位下ニ叙シ甲斐守ニ任ス

廿八日登營拜謝

是歲十二月諸臣歲晚貧困ニ堪サルモノニ祿高石ニ銀五十目ヲ度トシ貸與セシム

卷銀ナリ

廿六日大組福岡藤左衛門數年眼病ヲ患ヒ將來奉仕ノ途ナキヲ以テ永久賜暇請願セ

リ組頭ヨリ屢告諭ヲ爲スモ不服ヲ唱へ違法ノ行蹟アリ逼塞ヲ命シ家祿二百石沒收親族へ預付ス

本記拾遺附錄

六月廿六日當職山内縫殿ニ留任ヲ命シ財政ヲ整理シ諸臣馳走米返付セシメントノ公ノ意旨ニ因リ公儀人兼重五郎兵衛交代歸國ニツキ縫殿へ御書及御意書左ノ如シ

御意書略元文四年
五年請事小々控

一筆申遣候共方事去夏職役申付候處所帶向去今年之仕組等相調候付而當春辭退之儀内々聞届令抑留候然ハ來年我等歸國之上又々辭退之儀申出候ても差替候儀難成候條氣分取繕可有所勤候左候へハ來年より所帶仕組之儀兼而吟味之筋有之事候條何分追而可相伺此者差下候付申遣候猶年寄共より可申候也

六月廿八日

御判計

山内縫殿とのへ

御直筆にて御端書

尙々其方功者之事候間氣分保養候而可相勤候此度仕組之儀においては我等所存之儀も候條其段は追而可申遣候

加判毛利筑後毛利宇右衛門へ御書御意書裏判粟屋勘兵衛へ御意書當役堅田安房ヨリ當職山内縫殿へ通牒書簡アリ皆略ス

七月二十日當役筆者津田市右衛門ニ財政用務ヲ齎シ歸國ヲ命シ當役堅田安房ヨリ當職山内縫殿へ書簡及ヒ本年六月兼重五郎兵衛歸任ノトキ安房ヨリ縫殿へ通牒書ニ對スル答書等皆財務ニ關スル重要ノ意見ヲ述へ財政之基礎ヲ定ムルモノナリ數十枚ノ多キニ涉ルヲ以テ收録ニ違アラヌ

十月十日當役筆者津田市右衛門ニ出府ヲ命ス當職山内縫殿ヨリ演說書並内演說書等長文ヲ以テ略ス

十一月十五日當役筆者津田市右衛門ヲ國元ニ還シ當職山内縫殿ニ出府ヲ命シ期スルニ來年正月三日後ヲ以テス

同日當役筆者津田市右衛門ニ銀二枚下付市右衛門本年夏歸國ノトキ金五百匹下付是日折返シ出府ニ因テ也

元文五年庚申正月公江戸邸ニ在リ

四日長門國阿武郡須佐浦へ去年十一月朔日八人乗朝鮮船一隻漂着之ヲ幕府ニ報シ長崎へ護送例ノ如シ

同日當職山内縫殿萩發途二十五日着府手元役山縣市左衛門所帶方宇野與一右衛門筆者山田半左衛門所帶方下役野田平右衛門隨行セリ

同日是日ヨリ加判毛利筑後毛利宇右衛門月番ヲ以テ當職ノ事務ヲ勤ム

十六日昨十五日公登營途次先箱ト徒士野村傳右衛門佐藤五郎左衛門大森文左衛門トノ間行列ヲ冒シ通行ノモノアルヲ覺ラス緩怠ノ行爲ニ因リ逼塞ヲ命ス

二月五日毛利甲斐守匡敬參向之公家衆馳走役ヲ奉ス

十六日江戸留守居兒玉豐前着府夫人妊娠ナルヲ以テ早く出府セシム

廿一日夫人櫻田邸ニ於テ女子分娩豐子ト名ク

廿九日手回物頭桂二郎右衛門以下十一人任免アリ

三月五日當職山内縫殿公務終了賜暇ニツキ紋付小袖一召下羽織一下付手元役山縣市左衛門ニ遣小袖一所帶方宇野與一右衛門ニ遣羽織一筆者山田半左衛門ニ銀一枚

所帶方下役野田平右衛門ニ金二百匹下付御座船營繕祈禱ノ勞ニヨリ國分寺へ吳服

一金三兩御座船營繕苦勞ニヨリ中川與右衛門ニ吳服二銀五百目檢使堀八郎兵衛ニ

吳服二銀百二十目冷泉五郎兵衛高井與右衛門ニ各吳服一銀八十目下付

六日當職山内縫殿歸任ニツキ加判毛利筑後毛利宇右衛門へ御書及御意書老臣手回

役城代大頭大組中三田尻兩頭寺社奉行裏判役直目付へ御意書及諸臣へ御意書老臣

添書ヲ授ク

諸臣へ御意書老臣添書は後に出づ其他御書御意書は皆之を省く

七日夫人親光公室松平兵部大輔宗矩妹客月下旬ヨリ感冒發熱病勢日篤是日未牌遂不起年十九法

名融芳院十三日之ヲ天德寺ニ葬ル後遺變ヲ萩龍昌院ニ收メラル

十三日將軍ノ使者高木主水正來テ喪ヲ弔セララル

廿七日公歸國ノトキ日光社參ヲ乞願許可アリシモ夫人ノ喪ニ當ルヲ以テ日光社參

ヲ止メ木曾路旅行ノ請願認可アリ

四月朔日原權右衛門ニ豐子姫裏老ヲ命ス

四月六日當職山内縫殿萩ニ歸ル八日藏元ニ於テ加判毛利筑後毛利宇右衛門へ御書

御意書裏判粟屋勘兵衛直目付井原藤兵衛へ御意書ヲ交付ス

同日石州長安寺燒失當家ヨリ安置セラレシ元就公ノ位牌木像火災ヲ免レ同門長福

寺へ遷シ守護セシヲ使僧ヲ以テ圓通寺淨土寺ヨリ寺社奉行へ通報アリ因テ木像ニ

關スル洞春寺舊記及寺社所日帳抜書萩ヨリ江戸へ通牒左ノ如シ

覺

一先年從石州長安寺御木像爰元へ御遷座被成候趣左に書記差出候

一壽徳院様御入國の年石州長安寺被罷出公儀へ被申上候は元就公御木像御安

座所及大破雨洩り候間修覆被仰付被下候様被申斷候處毛利市正殿御當役に

て被仰候は先其御木像持參候は、各へ拜見致せ候様被仰候處其儘御木像持參被入御覽候就夫御當役中被仰候は此御木像は此元へ預り可申候其元へは洞春寺に有之候繪の尊像表具申付可遣候然上は當家中より少宛の寄付銀可遣と被仰候へは長安寺即時請相候故當時の御影雲谷等恕へ寫被仰付上の贊當寺六代目澄長老書寫仕結構に表具被仰付尤始上御家門中御老中組頭衆其外御役人通迄寄付銀被差上石州へ被取歸候由御座候左候て御木像は上箱被仰付當寺へ念を入取置候様に被仰付候其後何年ふりにて候哉長安寺又々被罷越御斷被申上候趣は御木像御影に仕替中々不可然由御斷被申上候元來長安寺へ三十石の御朱印は御木像有之故不相易御代々御朱印頂戴仕來候如是龜抹に被仕候は、向後御朱印御取上げ可被成候に付江戸被參居候御代官御申被成候間早々右の御木像御返被下候様達て御理被申候故此元御相談の上新敷御木像前々の通被仰付可被遣候夫にて可相濟哉御代官承合候様被仰渡候へは長安寺早速石州被罷歸御代官へ被申候へは御木像にてさへ候へは不

苦と被申由にて此元へ參其趣被申上候へは早速京都へ被仰登御木像新規に被仰付此元下着の上長安寺へ被遣候左候て先年被遣候御影持參之公儀へ被差返候を當寺へ被差上候御木像御衣裳下には赤地の錦直垂を被爲召上には島のもやう有之道服を被爲召九のうちに一文字三星の御紋金にて高蒔繪の様に相見所々に付候大形すれ候てはつきりと見へ候は二ヶ所盡相見申候右の通舊記に相見候御木像當寺へ御入被遊候年月の儀舊記に相見不申候事

一御木像御安座寶永七寅年四月二十二日にて御座候事

右の通舊記に相見候通書付差出申候以上

閏七月十三日

洞春寺

元錄十三年八月廿五日寺社所の日帳書拔

一石州長安寺儀今度各兩人書付を以申出候趣は往古より拙寺方に御安置被仰付候元就公様御木像先年壽徳院様御代御預り被遊候節拙寺方にも如先規不相替爲朝暮勤行と御座候て御繪像に御差替御安置被仰付候其上墨付一通時

の御奉行毛利八郎左衛門殿より被下置于今拙寺へ所持仕候然處に九年以前
又々新佛の御木像に御仕變被遊右の御繪像御取替被遊候て新佛の御木像拙
寺へ御安置被仰付候希は右の御繪像御木像に御取替被仰付候御墨付一通被
下置候は、忝奉存候右の新佛御木像に御差替被仰付候儀は都合六戸八郎左
衛門殿御當役の時分にて御存知被成候事に御座候間可然様に被成御沙汰候
て御木像の墨付一通被下置候様にと奉願候毛利八郎左衛門殿御當役の時被
下置候前方の御墨付の寫を以只今入御被見候間宜様に御沙汰被成可被下候
との書付一通

覺

一元就木像被預置候儀は貴寺墨付の辻候事

一爲朝暮勤行旁繪像の寫申付相渡候事

一旦那相對の儀中絶の方へは何も相對無之候へ共貴寺御事は餘寺に替り候故
今度相對被仕候事

右爲後記如斯候以上

貞享五年十月十八日

毛利八郎左衛門

石州長安寺智向和尚

右の通差出候付而各了簡として墨付差出候儀も不相成候付今日御老中御揃
揃の上右の書付八郎左衛門入御内見候處段々御詮議の上毛利八郎左衛門墨
付仕置候上に又此度墨付遣候時は繪像木像の墨付二重に相成候間前廉の墨
付差返候は、木像の墨付調遣可然の通無左候ては不相成の由申候て可然由
被仰候付て各兩人申分にして右の辻神保與右衛門を以申聞候處木像の墨付
被仰付可被下段忝存候乍爾前廉繪像の墨付石州へ此中に能便有之差返候同
宿不心得にて差返候付此度差出候儀不相成候重て罷越候節墨付可差出候間
木像の墨付被下候様にと申罷歸候事

四月十五日公歸國暇ヲ賜フ是日關札打粟屋庄兵衛江戸出發大組頭粟屋久右衛門大
組物頭兒玉與右衛門兼重新右衛門儉政ニツキ供從ヲ除キ先發セシム

同日非役一門老中諸頭諸支配ヲ藏元ニ召シ諸臣ヘノ御意書老臣副書願告左ノ如シ
元來御不勝手御不如意の上多年無據臨時の御入用等有之御先代以來度々御家
來中重き出米被仰付候處謹て遂御馳走御祝着被思召候就夫御家來中別て不勝
手覃至極候由連々被聞召上之御家督以來何とぞ御惠被仰付度被思召候處不被
任御思慮去年迄も御馳走の出米被仰付之御心外被思召候依之段々僉議被仰付
候處今以御借銀莫太の儀に付難及吟味候へ共猶又御儉約の儀ふかく沙汰被仰
付且御借銀繰卷の筋を以漸今年の儀は旅役出米の外御家來中御馳走米被返遣
之候尤大小身共に年來の不勝手に候間猶以面々儉約の遂吟味勝手取續御奉公
の覺悟肝要被思召候委細年寄共より可申渡候此段可申聞旨候

老臣添書

一御所帶年來御逼迫の上段々重き臨時の御入用打續き上方御借銀過分に相成御
當用に難相違に付無據御家來中年來御馳走の出米被仰付御借銀の繰卷を以御
當用をも且々被相辨候處御家來數年の御馳走に付大小身共に及困窮候段連々

被聞召上之別て御苦勞に被思召何とぞ御所帶御取續の仕組被仰付御馳走被差
返度旨兼ての御思召に候へ共相積候御借銀今以莫太の儀にて一ヶ年の利銀並
年賦御借銀の且納少々相加千九百貫餘無之候ては繰卷不相成候然は御藏納有
物を以右の分引之殘所江戸御國の御入用に當之候へは年々千貫目餘の御不足
相立其外御臨時の御引當も無之候て不相叶儀旁以御馳走可被差返吟味難相成
候付去年迄も出米被仰付猶此先も御借銀餘分減少無之内は御家來地下の御馳
走被仰請の外御仕組の筋不相見候付其段先達て達御聞候處御當代御家督以後
十ヶ年に相成御歸國も度々の儀候へ共被爲對御家來御惠の品無之段御心外の
御事候間御借銀の捌御儉約等の儀如何様に被仰付候て成共當年は御馳走被差
返度被思召候條申談吟味可仕の旨被仰付去年以來重疊遂僉議候上上方御借銀
御納方御繰卷御理心遣申付江戸御國諸御遣方御儉約減少の出目をも相加御仕
組の大概相調候へ共未行届不申儀候處縫殿事江戸へ被爲召委細の趣被聞召上
候は、猶以吟味被仰付下地切詰候御遣方の内に候へ共御内輪の儀は大方被相

止候程に御儉約の沙汰被仰付且又去今年江戸御國の御臨時銀當年の御拂に當候分をも餘分來年へ持越の積りにて漸御仕組相調今年の儀は御家來中旅役米の外御馳走の出米被差免候何ヶ度も御家頼困窮の段別て御若勞に被思召候御儉約被盡御手御借銀御納方繰延御臨時銀持越等の才覺を以右の通被仰付候段御心入の御事難有可被存候尤御家來中多年逼迫此度の御惠にて潤ひ行届可申儀にても無之候へ共前斷の趣に付此上借銀等の御了簡一向不被爲成儀候間此段大小身共に能々被相心得彌以諸事儉約を用ひ所帶取續の覺悟肝要に候事

但御馳走米被差返候ては諸借銀納方の仕法引米等の沙汰被仰付候趣前々よりの儀に付此度も引米可被仰付候得共數年の御馳走漸今年被差返儀に付偏御惠の御了簡を以先引米の沙汰をも不被仰付候尤去今年借銀の儀は追て何分其沙汰可有之候事

一御役所勤の面々は身柄の苦勞且御役に付造佐入も有之事候間御家來中御惠に準し候ては猶相應の御心付等も可有之儀候得共左様の御沙汰に懸り候て

は一ヶ年の御馳走被差返候儀も不被爲成候間前々よりの被遣銀借銀等歩増の沙汰は不及申還て本銀の内一步引半減等に被仰付候在役の面々迷惑の事に候得共御家來一同の御惠有難被存隨分勘略の吟味を以此御時節神妙に御奉公の心得尤候事

附強て其理不相聞儀にても流例を以被遣來候米銀等は此度被相改減少又は不殘御引せ被成候て可有之候然上は於平時御心付借銀等の儀も縱其理有之且先格流例の趣有之候ても難及御沙汰候惣て愁訴願事近年の通被差留候事

一旅役出米の仕法別紙に有之候事

附病者幼少出米の儀享保九年の格を以五步増に被仰付候御扶持方成の面々も右同前の事

右被存此旨組支配中へも可被申渡候以上

申の三月

堅安房
山縫殿
毛宇右衛門
毛大藏
毛筑後

旅役出米割方

一高百石以上

現米五石

一高百石以下

現米四石

右御船手兩組以上

一高百石に付

現米三石七斗

右遠近付寺社組

一高百石に付

現米二石七斗

右御藏元近習通りより三田尻小船頭迄

一現米十石に付

現米一斗五升

右足輕以下出米の分

一病者幼少出米の儀享保九年の格を以五歩増にして出米被仰付候事

附御扶持方成の儀も右の通出米被仰付候事

一米銀持合の者は勝手次第銀子にて差出候は、和市二石替にして可差出候御切

錢取の儀は如古法五石和市被仰付候事

一被石へは出米被差免候事

一二人扶持計の者へは出米被差免候一人扶持にても持合二人扶持より上に相候

者の儀は出米被仰付候事

一御雇隠居料女中の御恩且亦御恩同前年々被遣候米銀の儀は出米の不及沙汰候

事

右の通被仰付候條可被得其意候以上

申の三月

按するに今回財政經理の要領は公襲封以來已に十年の星霜を經歷歸國せらるゝも累歳國計不足の爲め諸臣に苛酷の出米を課し少も恩惠扶助の途を講ずる能はず公大に之を憂患せられ終に山内縫殿を江戸に召し經濟に於ける精査審議を重たる結果今年は旅役米の外馳走出米を免除すると云にあり

廿日檜崎彈右衛門熊谷彦右衛門井上甚七郎粟屋庄兵衛上野消火番ニツキ一番手騎馬ニシテ非番ヨリ派出當番ノトキハ使番命セラレ非番ナシニ勤務苦勞ニ對シ各銀十枚下付

廿一日近侍竹田彌左衛門數年勤務ニヨリ銀五枚下付

廿四日足輕以下雪踏深編笠高木履ニ關シ訓示左ノ如シ

一御屋敷内外に於て足輕以下雪踏はき候儀古來より不相成流例候處近年は雪踏はき候もの間々有之由相聞候事

一於御門外足輕以下又家來深編笠被候もの間々有之様相聞忍ひの姿に相見いかに候事

一又もの御屋敷内にて雪踏高木履狼はき候もの有之様に相聞候事

右兼て御目付方へ被仰聞の趣も有之候間見答可申候間内意申達候事

廿七日江戸留守居兒玉豐前豐子姫裏老原權左衛門長壽夫人裏老兼重五郎兵衛宇田

川夫人右馬左衛門裏老飯田六郎兵衛ニ黒印令條ヲ授ク

廿八日公江戸出駕中山道ヲ經テ歸國ノ途ニ即ク

五月二日馬屋原猪右衛門是時小郡代官勤務中開作地ニ關シ前後矛盾ノ命令ヲ爲シ

タルハ不注意ニ因リ逼塞ヲ命ス

同日毛利甲斐守匡敬信使櫻應ノ爲メ駿州吉原へ出發六月二十一日歸府

十五日公歸途京都ニ抵リ諸司代土岐丹後守ニ報告シ一條鷹司兩邸ヲ訪問セラレ大

德寺塔頭黃梅院へ養心院夫人位牌安置初テ參拜即夜京都ヲ發シ伏見ニ出テ搭船十六日朝大

坂ニ達ス

廿一日ヨリ六月十二日ニ至ル吾藩大坂玉造岡山町ニ所有抱石築石用ニツキ幕府へ公收セラレ

三十日大名以下ニ命ス徳川十五代史

一御城内外召連候供廻の儀前々より度々相觸候通堅被相守之惣體の風俗目立不申様に作法能申付於途中も互に片付通の障に不相成様に彌可被申付候別て近來は猥に相聞供廻かさつ成も有之由候間申達候且又御曲輪の内は手代りの者召連候儀無用に被致へく候於外曲輪も手代りの者は跡に召連可申候

日不詳公歸國ノトキ淀川通船橋上人拂ノコト大坂留守居井上源三郎大坂總年寄役薩摩屋仁兵衛へ交渉セシニ橋上往來ハ大坂城代ノ外制止スルヲ得サル所ナルモ近年松平大隅守松平安藝守ノ前例アリ仁兵衛ノ下役へ依頼シ公通船ノトキ橋上人拂ヲ遂行ス因テ薩摩屋仁兵衛下役へ金二百匹小使へ鳥目三貫文交付セリ

六月朔日公歸城禮使乃美仁左衛門ヲ出府セシム

三日増上寺宿坊修繕ニツキ閑老ヨリ通牒ニヨリ銀二百枚納付セラル

四日公歩行初ニ宮崎社參アルヘキモ服穢ニヨリ當役堅田安房ニ代拜セシム是日公宮崎社司吉屋主計宅ニ臨ム

六日江戸加判毛利大藏老年ニヨリ國元加判役ヲ命ス來年江戸加判ヲ毛利宇右衛門ニ其次毛利筑後ニ命シ供從セシムヘシトナリ

十一日國司與一右衛門ニ法林夫人裏老ヲ命ス齡七十歳ニ達シ隱居抑留ニヨリ金二十兩下付

十二日毛利筑後ニ土宜トシテ越後縮三反下付

廿五日村上平左衛門ニ大檢使ヲ命シ西御殿ニ出務セシム

廿八日城代日野七兵衛病死ニ付福原貞右衛門ニ後任ヲ命ス

三十日奥右筆ノ輩ニ命ス徳川十五代史

表向の輩に交るへからす又大名の邸にゆく事兼て相斷るへし又者陪臣と集會すへからすとなり

七月三日手回物頭信常太郎兵衛佐竹善左衛門書院小性宇野源兵衛供徒士羽仁長右衛門外十人徒士番頭長安平右衛門公歸國ノトキ供ハツレニ付逼塞或ハ遠慮ヲ命ス五日時親公四百年忌洞春寺ニ於テ修セラル齋料トシテ銀三枚香奠金二百匹納付セ

ラル洞春寺ニ掛位牌ト號シテ開山以來毛利祖先ノ名稱法號記載セリ時親公モ載セテ此中ニアリ

七日地陸通渡邊彌兵衛父庄左衛門實母ニ不孝ノ行蹟アリ實母訴訟ニ及フ審問ノ結果庄左衛門ヲ流刑ニ處シ彌兵衛給米ノ内減少セラレ

廿日井上與四郎齡七十六歳ニ達シ辭職留任召下上下下付小川助右衛門養心夫人入與前ヨリ隨屬三十八年精勤ニヨリ隱居ヲ許シ金十兩下付乃美八郎左衛門二宮清藏ニ大組物頭役ヲ命ス書院小性高杉小左衛門三十一年勤務ニヨリ銀二十枚下付書院小性御郷五郎左衛門村田貞右衛門香川次兵衛二十年以上勤務ニヨリ銀十枚下付中山閑彌嫡子雇ニテ數十年陣借勤仕ニヨリ金三兩下付水練公覽ノトキ好成绩ニヨリ松原藤八郎外十四人ニ金三百匹又ハ金二百匹下付アリ

廿五日山内縫殿家計困難ニツキ當職在勤ノマ、引田成ノ請願ヲ允可ス縫殿ヨリ出願書及命令左ノ如シ元文五年同六年諸事小々控

覺

私儀元來不勝手に御座候處家督砌より御先代以御心入御側被召仕御役十四年相續一往如願被成御免候の上三ヶ年に銀五十貫目御納替被成被遣有難仕合御座候然共下地不勝手の上數年の御役御番手も度々の儀内借彌増莫太に相成候故右御納替以後も取續六ヶ敷至極内證儉約仕罷居候内再役被仰付六ヶ年相勤猶又借銀相増其上虫枯の節内證檢見仕候故莫太の損失有之尤追て御了簡の筋も御座候得共彼是彌太分の借米銀に相成納方不得仕候付御役御差免之上重き儉約仕内證は引田同前にて罷居候内家内無據造佐入の廉有之其上四年以前御當地御發駕の朝御留守中の御役被仰渡各別儉約も難相成候内去々年御歸國の上引續當御役被仰付只今迄所勤仕候右の通數年の不勝手持越に相成色々才覺を以一兩年は取續候得共至當年候ては確と絶方便候間五六年引田御差免被下候は、公借内借追々返済可仕候當年の儀は御家來中重御惠の儀被仰出候上殊に當役にて罷居ケ様の願別て迷惑奉存候得共行詰候勝手別段致方無御座前段の通御座候條何分宜様に御取成可被下候以上

七月

別紙に

引田の儀別紙覺書を以御斷申出候然は御役中の儀尋常の引田の格にては難相續御座候間御役に付ての造佐入御了簡を以各別に銀二十一貫目御惱石の内手取被仰付候様と願存候以上

山内 縫殿

山内 縫殿

右引田成並御役中に付右爲入用手取石引添の儀も達御聞如願被仰付候事

山内 縫殿

右不勝手付て持懸知行四歩一の堪忍にて殘所引田を以借銀返濟の儀如願被差免候事

山内 縫殿

右此度引田の儀如願被仰出候四歩一御法の外流例を以百五十石の引添尙又只今の御役に付入用として手取石引添の儀も達御聞如願被仰付候との御事

閏七月八日加判役毛利大藏家計切迫負債消却ノ途ナク職務奉シカタキニヨリ毛利宇右衛門引田ノ格ヲ以テ引田成ノ乞願許可アリ
十七日法林夫人裏老國司與一右衛門ニ黒印令條ヲ授ク與一右衛門七十歳隱居ノ乞願ヲ許可セサルニヨリ金二十兩下付西御殿付木村甚右衛門紋付上下一具下付永昌院夫人請求ニ依テ也

廿五日萩城三郭城濠吐水ノ爲メ去冬北ノ濱へ新ニ溝渠疏水工事ヲ竣成シタルニ兩側濱砂潰崩ニヨリ高七尺長四十間餘ノ石垣修築砂留ノ請願認可アリ

廿九日山鹿甚平ニ隱居料トシ米十俵下付長府ヨリ泰祖公供從數十年勤務ノ勞ニ依ル仙波小左衛門隱居ニツキ米一石下付

同日本九門所管佐々木治右衛門家人公物窃取ノ科ニヨリ家祿高百六十八石ノ内三步二百十二石沒收殘三步一五十六石嫡子へ下付治右衛門ニ隱居ヲ命ス關係人横見

一兵衛ニ逼塞ヲ命ス

此月日不詳三奉行道中奉行ニ令シテ隱賣女踊子茶店女中飯盛等ヲ禁ス令文略徳川實紀

八月五日兒玉傳兵衛記録所役ヲ免ス帷子一下付

八日五節旬月次登營其他本丸ヨリ西丸へ出仕ノトキ下乗内ノ供從ニ關シ發令左ノ如シ大目付同狀

五節旬月次御禮日其外本丸へ出仕有之夫より西丸へ出仕の節内櫻田下馬込相候付向後西丸へ被相越候面々は下乗内の供廻りにて被相越外供廻りの儀は西丸より退出の向寄次第御本丸へ登城候と直に松平左近將監屋敷脇本多伊豫守屋敷前相廻し置可被申候和田倉の方へ退出の時分は内櫻田下馬に其儘可被差置候勿論西丸へ出仕無之分は不及其儀候右に付承合度儀候は、能勢甚四郎安部主計頭兩人の内へ可被承合候
右の通り可被達候

八月

九日岡吉右衛門市川半左衛門書院役ヲ免シ二十年以上勤務ニ因リ各銀十枚下付
十二日當役堅田安房辭職ヲ許シ榎本彈正ニ後任ヲ命ヌ安房へ腰物一長船代金十枚下付

十六日坂九郎左衛門手元役ヲ免シ所帶方田坂半左衛門ニ後任ヲ命シ大組ニ加フ厚母惣左衛門ヲ手回組ニ加へ所帶方ヲ命ヌ瀧野喜左衛門大檢使役ヲ免シ河井七右衛門豊田權右衛門ニ大檢使役ヲ命ヌ

廿一日ヨリ二十三日ニ至ル養心夫人一周忌大照院ニ於テ法會終セラレ是日公參拜
二十二日江戸青松寺ニ於テ法會執行銀十枚米十俵納付

廿七日萩城南門臺所門物頭廢止及扶持方成中養子縁職ニ關シ伺定左ノ如シ

覺

一御城南の御門御臺所御門兩御門番の物頭正徳三年より御儉約に付御引せ組番計被差置夫以來今以其通に御座候享保九年御馳走被差返候以後事に御儉約にて無之時節の通虫食戻たる儀も御座候へ共兩御門の儀は何分の御沙汰無之正徳三年省略の通候事

一享保十九年御扶持方成内家督の儀僉議有之累年の御馳走故借銀返濟も年を経延引に相成不慮の儀有之候ては虫食減少に曳懸り迷惑の儀に付虫食可被仰

出候御馳走被差返候時は本の通たるへきとの儀にて夫より家督追々被仰出候身分の縁職養子の願をも同年より被差免猶又元文三年嫡子娘の縁職の儀凡の年齢後れ候者も^虫食^再縁の吟味も不相成家^虫食^世話人無之差問候ものも有之に付忤の縁職娘の縁組被差免候右孰も追々被差免候廉々今以其通に御座候事右の通近年重き御馳走打續候故御省略且御了簡の筋右^虫食^有之候當年御家來中御馳走差返され候付以前の通に可被差戻候哉と僉議仕候處に先今年計御馳走被差除此先被相續候段難計御儉約の儀は別て御沙汰有之儀に候へは先行懸を以兩御門の儀も只今迄の通物頭不被差出組番^虫食^被差置且御扶持方成衆養子縁職等の儀も近年の通格別御改の御沙汰に及申間敷哉

九月八日村里租徭並村費等ノ會計ニ關シ發令左ノ如シ大目付同狀

一諸國村々大小の百姓共年貢並諸役懸り物或村入用等至迄毎年名主組頭念を入帳面にしるし惣百姓立會勘定無相違にをいては銘々印形取置可申尤名主組頭も右帳面に與判可仕候事

一右は定りたる事たりといへとも端々には年來の仕ぐせを以て毎年勘定帳面百姓印形をも不取置出入に及び候儀間々有之候條自今以後此旨急度可相守事右の趣知行村々へ可相觸候若此以後出入に及び候節途吟味件の觸書不致承知村方有之は地頭可爲越度候以上

申九月

十五日八組頭渡邊太郎左衛門辭職ヲ許シ召下羽織一下付完道式部ニ八組頭ヲ命ス
廿三日公在國中諸臣在郷請暇ニ關シ國元留守居三人ヨリ江戸當役へ伺指令左ノ如シ

奉窺候覺

此段在國中の儀は大小身共に城下の勤肝要の事候へは如古法在郷暇の儀は不可許容候雖然至極無據趣有之其時節延引難成儀にをいては可令許容然とも其時々了簡と有之時は定例無之可逮混雜儀に付今度其沙汰申付伺書の通聽届肩書申付候條此趣を以て可有沙汰候尤公用支無之段僉議の上可被相回事

一御在國中諸士中小身共如古法在郷御暇被下間敷哉雖然無據差問候儀有之節は於于時詮議の上従前々御暇被下候例有之儀候條自今以後も至極無據儀は御暇可被下哉

此段本書の通令許容事

一父母於田舎病氣大切に成爲看病御暇願出候へは右の趣詮議の上於無紛議は御暇被下來候自今以後も右の通にて願出候は、御暇可被下哉

此段可爲前格之通事

但右體の節は御番をも被差除來候

此段本書の趣到其節能々遂兪議可許容事

一同名間又は親類にても田舎に罷在不慮の儀有之候歟其外至極難問子細有之親類の内罷越取計ひ候はて不叶儀有之其者に際り不能越候て不叶首尾に候は、詮議之上御暇可被下哉

此段其家元祖の儀は不及申其以後の世代たりとも各別の趣有之元祖同様の事に

候は、其節公用の支り無之上は可令許容事

一於知行所先祖菩提所墓所等も有之元祖遠忌の法事等營候は、爲焼香の往來

三四日迄の御暇被下其外の遠忌等には御暇被下間敷候哉

此段父母の儀は格別の事に候間知行所又は其外にても墓所於有之は家續人の儀は不逮申實子の儀は他家相續の者たり共一周忌三年忌を始其外の年忌たり共可令許容尤其砌公用の支り於有之は堅可爲無用事

但右の外は父母の年忌迎も施主の年齢傾き此先の年忌迄は存生の程も難計趣にて申出候筋も於無餘儀は其節の御了簡を以被差許候儀も有之無左候ては不被差免段往古よりの御法にて御座候然共以來は父母にて候へは三年七年等の無程年忌毎にも御暇可被下哉

此段可爲前格之通事

一煩三十日を過不得快氣病人帳に着候者入湯などの御暇願出候へは前々より被差免來候自今以後も御暇可被下哉

此段役儀差留候上病氣爲保養入湯延引難成病體且落馬其外怪我人入湯是以其砌延引難成趣に候は、其年の在國に限り可令許容候事

一御役勤候者の内當病にて御役難續達て辭退の儀申出候者有之其役座又は依其人柄難被差替他の見分も無紛病體にをいては爲療養入湯等延引難成趣に相見候は、依替儀御暇可被下哉其外落馬仕候歎又怪我なと仕候は、差向入湯仕候はて不叶者の儀も御暇可被下哉

此ヶ條前條に相見候事

一當病にて御役御斷申出候程のもの被差留候上爲保養入湯などの御暇願出候は、其年の御在國中に限御暇可被下哉

此段自今如古法留守居所の可爲沙汰候尤大身の面々程在國の中暇の許容難成候條於趣は此伺書肩書の通たるへく候雖然至極無據儀於有之は一門の面々老中迄は此外の儀たり共願の筋によつて遂了簡儀も可有之候事

一非役の御一門並益田福原の兩家無據趣にて御暇願出候儀元祿の初比より段

々移變候て年來當役勤候もの同様に江戸方當役迄申出候様成來候自今以後は改て任古來之御法各御役座へ申出候様に被仰付差向御用無之候は、御暇可被下哉

此段休息の年寄共を始寄組其外たりとも此伺書肩書の趣にをいては無據其斷有之事候條可令許容組付以下多人數たり共此伺書に有之分は無紛其名目有之事候間下より斷候上紛れかはしき儀無之様に能々遂兪議相伺可被申候將又年寄共の儀は於于時當役中相談の公用可有之候間無據儀なから一同に罷越候儀は可爲無用候尤其外たり共在役の面々同役一同に罷越候儀可爲無用事

但休息の老中は御在國中御暇被下候先例不相見候然とも難閑筋にて御斷申出候は、依替儀以來は御暇可被下哉至寄組其外末々候ては夥敷御人數の儀候へは御法も届兼混雜或はなぞらへ候儀も可有之候古法の通一向不被差免候様に可被仰付哉

此段可爲本書之通事

一知行所損亡に付差向自身罷越見合不仕候て難成趣有之御暇申出候は、詮議の上前々の通御暇可被下哉

此段可爲本書之通事

一病用に付御醫師の内無據御暇願出候は、詮議の上御暇可被下哉

此段可爲本書之通事

但急病人の節一二夜の御暇の儀は各承届被差許候上追て及御聞候様に可被仰付哉

此段如古法二ヶ月に相限るへし尤前月の下旬に及罷越病氣其外無據儀にて三ヶ月へ越候断の筋有之候は、往來共に日數六十日を限可令許容事

一御暇二ヶ月迄は依御断之越被差免候三ヶ月へ越候ては一向不被差免段古來の御大法に候然は幼少の者の外及三ヶ月候迄御暇可申出儀にて無御座候へ共以來若無據譯を以御留守中迎も左様の御断申出候時は下にて沙汰筋差聞申儀御座候此段如何可被仰付哉

此段可爲本書之通事

但御在國中右等の御暇は不相見候長病人は各別の趣にも御座候間御宥免も可被成哉勿論末々に至り候ては平生月越御暇は不被下儀御座候

此段在國の中たりとも長病に對し月切の法を以被申候候は、可令許容事

一長病の者知行所へ罷越氣分保養仕度由願出候は、前々の通御暇可被下哉

此段可爲本書之通事

一休の者幼少は田舎御暇申出候は、前々の通可被差免哉

此段可爲本書之通事

一寺社家の儀は諸士中共違ひたる儀候條無據趣にて御暇願出候は、如前々可被差免哉

右の條々は從古來の御法の旨を以沙汰仕來候へ共今般改て奉窺候條御序を以被違御聽御肩書被成被下候様と奉存候此外沙汰難仕儀も有之候は、至其節に御窺可仕候以上

元文五年九月廿三日

毛利宇右衛門

毛利大藏

毛利筑後

板本彈正殿

右肩書の旨可被申付者也

元文五年申十二月十五日 御黒印

廿八日毛利讃岐守駿府加番ヲ終へ歸府翌年四月迄滞府

廿九日福原與三左衛門壯年ヨリ乘馬術ニ専心シ數多ノ子弟ヲ教授セシニヨリ時服

一下付

九月日不詳後房ニ於テ慰能及正統祖先法會ノトキ高野山代拜ニ關シ地方老臣伺定

左ノ如シ

今度於御奥御慰の御能被仰付 寄組通りより八組中迄御目見仕候本人嫡子共一

切唯今迄能見物不仕ものともは此度御能見物可被仰付との儀寔以御入心の御事

候惣體御奥にて御慰被仰付候御能の儀は下より何かと例を引見物仕度通願可申

筋にて無之儀は勿論の事に候被召出見物被仰付候者の儀は其時々御心入を以の

儀に候へは下より希可申譯にて無之儀を毎事不心得の願有之候向後の儀は御奥

にて御慰の御能被仰付候節其時々御心入を以被召出見物被仰付候者は各別其外

の儀は前々より被差出來候面々たり共見物として被召出間敷候然上は下より何

かと唯今迄の通相願候とても一向不被違御沙汰候條此段控に留置其時々可有其

心得候事

申九月

覺

御正統御先祖様方御法事の節高野御代參の儀其御佛様御由緒の者只今迄被差越

候得共當時御儉約内其上御由緒の者は御法事の節は御寺詰をも被仰付其詮も相

立候間向後は大坂御留守居爲御代參高野被差越候段御伺濟御沙汰相極候事

元文五申九月

十月八日公孺ニ夫人逝去セシモ再醮ノ意志ナキニヨリ公儀人井上半右衛門ヲ出府
關老本多中務大輔へ内議セシメタルニ中務公ノ意思ヲ首肯シ指示スル所ニ因リ提
出書等左ニ記ス

井上半右衛門江戸就被差越候申合之覺

一半右衛門江戸着の上此度の趣法林院様へは大概豊前を以被成御知せ其外上々
様方へは御知せに不及御當家御系圖事頃日御系圖ノ趣其外御内々御用に付被
差登候段相唱候様に被仰付候事

一中務大輔様へ冷氣爲御見舞御書被爲進之御音物被差越候尤御使者被相務候儀
は一應又右衛門へ相對の上にて被罷出可然候次に又右衛門並御用人中御意取
繕可被申聞候

但又右衛門へも被遣物有之候

一此度の一事又右衛門へ内談仕候趣は井上又右衛門は本大膳大夫家の儀は御存
多中務大輔用人也の通古き家筋にて由緒の者多其上大家にて罷在候節途軍功候筋目の者數輩有

之候故難見放太概今以召抱居候付て家中の人数も石高不相應の儀にて前々よ
り勝手不如意に付家中へも年來出米等申付且借金銀の才覺彼是を以漸諸用相
違來候處十ヶ年以前居屋舖中屋敷類焼長門守卒去當代家督國中田作虫枯其後
婚姻去今年祖母奥方不幸段々の造佐入差湊且又厄害の部屋方多旁に付借金銀
莫太相増差岡に付家中へも猶又重き出米申付諸事儉約を以且々參勤をも仕候
仕合御座候依之家來の儀も至極及困窮候へ共扶助を加候儀も不任心底候段は
兼て御内嘶をも仕置候通御座候然は奥方不幸以後再嫁の儀をも家老共吟味仕
候處並方の御衆中様多例も無之儀第一御並方其外重き御方の縁談等仕候ては
愈勝手差岡申儀其上大膳大夫内存の趣も有之旁先再縁の儀一向差岡内外堅く
儉約相用何とぞ家來をも扶助仕公儀の御役缺不申様と萬端吟味申付儀に御座
候然處いつ比の儀候哉松平土佐守様御縁組の儀に付上の御思召も有之候へ共
土佐守様御断の譯有之たるやうに噂承傳候夫に付て大膳大夫再縁の儀も右體
の取沙汰有之由不慥儀ながら風聞承候於此方は從御城御入與の御先例も有之

事に付萬一左様の御儀も御座候ては家の面目外實旁無此上御事に御座候へ共右御咄仕候様に勝手向至極差詰候上の儀御座候へは當分先々共に必至と差間尤家中の困窮をも差捨置候ては公役等も難相務體に可罷成と氣毒千萬奉存候然共萬一上の御心入の筋を以被仰出候上は辭退可申上様も無御座彼是進退絶思慮誠に家の浮沈此時と奉氣遣儀御座候

一 中務大輔様兼て御心入の御事御座候間御自分様迄御内咄仕御内々を以被入御耳何分にも御吟味被成被下候様御頼申上候様の由大膳大夫内存に御座候尤御未發の内此方の致方も可有御座候は、いか様共御内々の御思召御自分様より被仰知被下候様と存儀御座候

一 右の趣寔風説の儀御座候へは御内咄仕候段も如何敷御座候へ共氣遣の餘り御心安き御自分様の御事御座候間拙者罷越申入候様に申付候

半右衛門心得覺

一 右爲御除御再縁被仰願可然由中務様御思召有之御由緒の御方御心當も有之哉と御尋被成候は、堂上方其外にも由緒の方も有之候間早速其吟味仕候様に國元へ可申越由可及挨拶候

一 御城よりの御入與にては無之紀州様より直様被爲入候様に御沙汰可有之御様子に相聞候は、是又前段に有之趣にて候間中務様御心入にて可爲成儀候は、其沙汰無御座様に御頼せ可被成候

一 右の趣兒玉豊前公儀人兒玉市之助小笠原仁左衛門共申談井上又右衛門え致熟談候様可被仰付候

一 中務大輔様御下意御内差圖之御物振も追々相聞へ當秋以後は江戸表何たる風聽も無之まして 上に左様の御物にても一圓無之於爰元氣遣候様子にても無之候は、其趣能々引しらへ猶又豊前市之介仁左衛門共申談候上半右衛門事早速罷下候様被仰付候借又此一件又右衛門及熟談急度御安堵も難被爲成様子にも候は、豊前市之助仁左衛門えも能々申合候而追々以飛脚密々に御注進仕半右衛門事は來春迄直様罷居其内寄々豊前市之助仁左衛門申合何とぞ中務大輔

様御心遣御精力を以御安堵相成候様随分と心遣可被仕候

中務大輔え提出書

覺

一私再縁之儀申談候様にと一家共及相談候得共存寄之儀有之候付堅く再縁は不仕覺悟に御座候段申聞候御筋目も有之儀に付兼而御咄仕置候通御座候間此段御聽置被成可被下候

一存寄と申子細は私儀數年不如意有之上先年虫枯以後別而勝手難儀仕候依之家中並百姓等に至迄憐愍難相届體にも可罷成哉と此所厚く心遣仕候依之再縁之儀不仕覺悟に御座候以上

十一月十八日

松平大膳大夫

廿四日三浦又右衛門ニ公儀人役ヲ命ス

廿五日公是日ヨリ大津郡瀬戸崎巡行十一月六日還城

廿八日本年春來風雨洪水數度閏七月二十二日最甚シ田圃損害高四萬七千七百三十

五石餘四倍ニシテ家屋流倒百六十七三倍ニシテ之ヲ幕府ニ上陳ス

長府領被害高五千三百六十六石餘倒家十八清末領田圃高千六百二十三石徳山領田

圃高六千五百七十二石餘

十一月十五日田北太右衛門ニ奥番頭役ヲ命ス

廿一日萩地諸川土砂堆積シ通船ヲ阻碍スルニ因リ浚渫方法費途ニ關シ當職伺定左

ニ記ス

一銀五十三貫目

内

十三貫七百六十目

但公銀

十三貫七百六十目

但諸郡

高六十三萬三千石程え割付候へは高一石に付而一錢宛に相當り申候尤川上村除之

八貫六百九十六匁

但御家來中

凡高四十萬石程え割付候へは高一石に付一錢宛に相當候事

十一貫百九十目

但市中

三貫七百三十目

但濱崎町

壹貫八百六十五匁

但川上村

以上

右川浚銀一ヶ年之積り今來年兩年出銀被仰付候へは都合百貫目餘之内七十貫目程も一往堀立入用銀に引之殘而三十貫目貸付被仰付六ヶ年目より年分五貫目宛引除浚仕候へは土一坪五匁宛にして方角々々え取除候積り凡千坪程取除相成積り御座候年々右之通に修補相成候へは先々大埋り仕間敷と奉存候

十二月朔日伊勢吾藩祝師村山若狹萩ニ抵り入國ヲ祝ス若狹前年類焼ニ因リ銀六十貫目ノ合力ヲ乞願スルモ許可ヲ與へス毎年交付ノ神領米ヲ擔保トシ金三百兩貸與ス

五日浦圖書享保七年六月ヨリ同九年正月ニ至ル當職役中防長兩國收入支出算用一

紙公覽ニ供ス圖書死亡ニヨリ嫡子主計へ褒詞アリ勘定奉行重見與三左衛門井上與四郎へ料理ヲ賜フ上勘頭取佐藤七郎左衛門厚母惣左衛門え各銀一枚下付

算用一紙覺

一總高九十一萬百十二石三升

内百四十五石四斗四升

新開

右之物成

米三十三萬四千百六十五石三斗

銀二萬八百六十七貫百五十四匁

内拂

米三十二萬六千五百五十六石三斗六升

銀一萬六千三百九十二貫八百九十目

殘

米七千六百八石九斗四升

銀四千四百七十四貫二百六十四匁

右貸付米銀共後任當職毛利筑後へ交付

十日寺社奉行赤川勘解由ニ記録所役ヲ山田五左衛門ニ寺社奉行ヲ市川三右衛門ニ目付役ヲ上ノ關代官ヲ井上四郎衛門ニ所帶方ヲ高井小左衛門ニ上ノ關代官ヲ赤木藤右衛門ニ赤間關在番兼務ヲ命ス

十三日萩城三郭中ノ惣門北ノ惣門土橋ノ下水道土砂ニテ埋リ左右石垣頽廢修築工事ハ閣老ノ内議ニ留メ成規ノ公許ヲ經ルニ至ラサリキ

十五日世子大納言竹千代君ノ名ヲ家治ト命スルノ令アル於是使者天野九郎右衛門ヲ出府拜賀セシム九郎右衛門翌年正月五日萩城門發程

同日京都三條吾藩抱屋敷服部與右衛門ニ賣却ス價銀十三貫九百目也町人大文字屋市兵衛名前ニテ河原町三條上ル二丁目ニ於テ下九屋町表口十五間一尺七寸裏行十六間二尺北東ノ角ニテ一間三尺七寸四方缺地有之二軒役ノ町屋敷一所正徳二年十月二月購求セシモ不用ニ因テナリ

十六日萩城門夜中通行ニ關シ物頭ヨリ大頭へ伺指令左ノ如シ

覺

御城當番於于時御用に付被差出候衆諸役人而諸士中に限り無據差急候御用筋致演説其旨趣分り候は、承届可被相通候足輕以下の儀は不及沙汰候事尤 殿様御供一途の儀は足輕已下たりとも夜中御門可被通候事

一諸役人其外にても御急用有之其趣承届無據儀に候は、可被相通候事

右諸役人と御座候時は、御城當番又は於于時御用に付被差出候衆の儀と存候其外と有之候人の儀は物切執迄に限り可申哉物切不相極候ては番人共迷惑仕儀に可有御座と存候條御門勘過被仰付候物通御書出相成候様被仰窺可被下候以上

十二月十六日

物頭 中

粟屋帶刀殿

廿日萩城門勘過ニ關シ記録所ヨリ遠近方へ訓示左ノ如シ

覺

御獵之物其外御肴等拜領被仰付候節は上使又は御歩行の者其趣相届罷通り候は
は承届候上御門勘過沙汰有之候事

一生花其外にても諸士持せ罷通候節は其趣相届候上御門勘過可被申付候且又足
輕已下之儀は只今迄の通切手にて勘過勿論之事

十二月廿日

同日玉川上水道福生村堀替及仕置普請出銀町奉行ヨリ回牒アリ堀替費用出金九十
九兩ト銀八匁八厘六毛仕置普請出銀三貫五百十五匁六厘五毛町奉行所へ納付セリ
廿八日明倫館費途ニ關シ老臣訓示左ノ如シ

一明倫館料として高五百石被付置候處諸稽古逐々増隆相成候付令不足候依之先
年修補銀段々取立被仰付候處逐々御仕組の御仕法或は拂銀通用の時節彼是に
付元利共捨り相成先年之御定法失其形學館逮衰微諸稽古共相續難相成候付段
々御沙汰の上別紙根帳の通修補銀被立置年分の不足銀右の利銀を以拂方相成

候様に此度年分の諸入用積り相成候條其辻を以無相違様に其沙汰可被申付候事
一文學諸武藝の師諸稽古増隆に付て人數被相増別紙付立の通候條後年共に右の
人數を定法にして増減無之様に可有相續候事

一右之面々御役料の儀近年三步引に相成候へ共此度御沙汰の上御了簡を以二步
引に被仰付候條後年以定法にして可有其沙汰候事

附學頭判事並算用方御役料の儀は於御藏元各別に被渡遣候事

一御家來中文學諸武藝共に相勵候儀は面々之造佐入を以無怠相續仕候はて不叶
事候へ共從上之御惠且諸稽古勵の爲段々其御仕向有之稽古被仰付事候間可成
程は夫々の道具不單損失様に師匠々々並稽古人共も痛み可有之段は勿論の事
候尤稽古人相増候時は夫々道具餘分入増可有之候へ共是又根の御積りも有之
事候間其師匠々々えも能々被申合可成程は損失餘分無之様心遣肝要の事候然
は稽古道具請拂の儀兼て有り有之事に候へ共其所々稽古人多少に應し入用可
有之事候間向後は其師匠々々え相渡候稽古道具夫々の物數付記置一ヶ年切に

付立を以可被申出候事

一入込諸生の儀先は若年の輩に候間學頭役差圖相守候儀は勿論判事役存寄たりとも得其意猥の儀無之様に可有沙汰候且又諸賄等の儀も御城御藏元御番食等の格式とは違ひたる事候條縦不任心儀有之候共修行の爲に候條無否何分穩便の心得可爲勿論事

一學館臺所諸入用其外ともに夫々の品分を以此度根積り有之事に候へ共猶其内をも省略の吟味仕入増無之様に日別月別の割方を調尤諸物買入の時分念を入り仕日々の請拂出入の儀は役人見届置月括りの算用を遂候様に判事役並算用方役人え念を入可有沙汰候事

右之趣を以後年共に無相違様に其沙汰可被申付候諸稽古之儀は御家來中御持方の爲肝要の儀に付御時節柄の儀候へ共修補銀等被立置自今相續之根積り被仰付候處此上年々不足相立候様に有之候ては明倫館退轉の基に候條被付置候役人中末々迄隨分無緩根積辻を以月々遂僉儀少にても入増無之様に手堅く可被申付候

此上役人中末々迄勤方不りの儀も有之候は、可被覃御沙汰候條御手前なとよりも氣を付趣も於有之は可被申出候以上

元文五申年九月

山 縫 殿
板 彈 正

内藤與三右衛門 殿
手同頭ニテ
熊谷 帶刀 殿
明倫館所管

儒武之師定員

學頭 山 縣 少 助
儒師

繁 澤 權 兵 衛
小 倉 彦 平
小 田 村 文 助
山 根 七 郎 左 衛 門

右之外儒師有之候へ共或老人或若年にて指南難成面々可有之事候間依人柄逐々入替相成御役料被立置人數右之辻たるへき事

今一人

兵書

吉田十郎左衛門

多田藤左衛門

大西助左衛門

山本六之助

禮法

小笠原二郎太郎

緒方仲助

弓

粟屋彈藏

元文五申年ヨリ被相加候 岩崎九兵衛

新陰

平岡彌三左衛門

馬來惣六

内藤又左衛門

十文字

岡部半左衛門

鹽谷源左衛門

健鎗

横地七郎兵衛

片山流劔術居合立合

元文五申年ヨリ被相加候 北川小平次

一流者一人

算術

松本猪兵衛

手習の師

坪井甚左衛門

右儒武之師自今右之人數を定員にして可有相續候尤病者幼少にて當分其闕有之分は其分にて差置逐て夫々の指南相成候節被差出にて可有之候其間合の儀弟子の内にて其流儀指南仕人柄有之本人並弟子中より於相願は被差出にて可有之候且又一流儀一人の師匠萬一其闕有之候は、何分到其節其流儀無斷絶様に被仰付にて可有之候以上

元文五申九月

明倫館造立以來修補銀に關する老臣より手回頭へ訓示左に記す

一銀八貫目

但明倫館御造立以來修補銀有之學館料不足價相調來候處に度々御仕組の御

仕法旁にて元利共に捨りに相成學館料不足相立諸稽古相續不相成候付享保十九寅之年江戸御當役山縫殿殿御役中銀六貫目江戸方より被差出於大坂御貸付相成當申の春元右之辻利分月別一步二朱にして一貫百五十二匁大坂より年々被差下候事

一同十二貫目

但學館修補銀八貫目計元居相成其利銀計にては學館年分不足の價不相成候付元文四未之年江戸方御當役堅安房殿地方御當役山縫殿殿御相談の上地方より銀六貫目江戸方より六貫目被差出申の春元にして中村彌次郎組近藤喜左衛門組へ利足加詰一割五歩にして貸付被仰付暮々於裏判所右の利銀一貫八百目の辻押置請取候様御沙汰相成候事

以上二十貫目

但學館修補銀として右の辻元銀被立置此利分年々二貫九百五十二匁宛學館料請加年中諸入用米銀請拂相成候様に御沙汰相極り候

一銀八貫目

但學館諸稽古到 御當代猶又御増隆の御沙汰就被仰付諸稽古の流儀師匠數
相増右御役料並稽古道具代銀共凡年分米單にして二十三石餘無之候はて
は不相調に付其越地方御當役山縫殿殿江戸御當役榎彈正殿御惣談の上學
館料現物成二百石の内五朱引にして米十石大修補料被立置候分右入用の
内へ右用意大修補の儀は作事方より可被仰付との御事候左候而猶不足の
處十三石餘價の爲右八貫目の修補銀地方江戸方より被差出候利足加詰一
割五歩にして天野安左衛門組近藤喜左衛門組へ貸付被仰付暮々於裏判所
右の利銀一貫二百目の辻押置受取候様御沙汰相成候此利銀引加右増師匠
の御役料稽古道具の入用ともに拂方仕候様御沙汰相極候

合銀二十八貫目

但明倫館修補銀本元として被相備置候

右明倫館修補銀取立被仰付候次第時々江戸方地方御用所御沙汰筋を請御根帳相

調候所如件

元文五申九月

張 吉兵衛

明倫館本簿

山 縣 少助

明倫館學頭

右令承知候到後年夫々之利懸帳を以請拂共詰り能無怠轉様に可有其沙汰候已上

八日

内 與三右衛門

熊 帶 刀

前書之通令承知候學館諸稽古の儀は 御先代以來段々其沙汰被仰付到 御當代
猶又御増隆の御沙汰有之に付各申談追々修補銀相備諸稽古無怠轉様其沙汰申付
候條前書の次第至後年全相違有之間敷候然者後年御所帶御仕組に付而右貸付の
利分令不足儀も有之候は、公米銀を以御足利被仰付にて可有之候且又學館料の
儀本米修補銀共此上全被相増候儀不相成候條儒武の師共此度御定の人數を自今
定法にして可有相續候其外諸入用拂方此度の根積辻を以費の儀無之様萬端遂吟
味永相續の可有沙汰候且又向後年分の諸拂相縮候たとひ殘銀有之候とも修補銀

元銀相増候儀は可爲無用候條少にても現銀仕置修補破損等の料物其外無據要用
相用ひ候様に可有沙汰候以上

元文五申年九月

山 縫 殿
板 彈 正

内藤與三右衛門殿

熊谷帶刀殿

廿九日渡邊太郎左衛門十二日病死ス嫡子小三郎忌明後家督命スヘキモ渡邊家ハ正
月四日公歩行初滿願寺へ供從ノ嘉例アルニヨリ喪忌ヲ免除シ家續ヲ命ス向後忌中
家督ハ命セストナリ

日不詳公在國中城門夜中通行ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

一御一門同嫡子益田越中福原豊後同嫡子老中同嫡子の儀は前々の趣も就有之夜
中にてても可被相通候事

一御手回頭

一御城代

一八組頭

一御奏者

右御番所より上り下りの節其旨 承届可被相通候事

一諸役人其外にても御急用有之共趣承届無據儀に候は、可被相通候事

一大出伺等廉有之節夜中御本丸御門通路之儀先格之通たるへし

不時の儀は記録所遠近方^虫被申候は、差圖可有之候兩所より沙汰被仰付

儀も可有之候事

一定る 御城内夜廻りの者をは只今迄の通可被相通候事

右御本丸御在國中夜中通路の儀前々より定法不相見御門物頭衆流例之覺只今迄

^虫通路の衆覺就も區々付て此度詮儀の上右之通被仰付候條此通を以被致沙汰

候様にとの御事

申十二月

月日不詳書院小性江川八郎左衛門三十年餘勤務ニヨリ銀四百三十目組内借ヲ命ス

毛利十一代史卷之六十三

大田報助編次

觀光公記六

寛保元年辛酉三月三日正月公萩城ニ在リ

六日毛利但馬守豊廣三男三助森對馬守假養子結約ノ報告アリ

十一日當職山内總殿辭職ノ意志公聽ニ達ス老練且國務多端ノ故ヲ以テ留任ヲ命ス
同日郭外發火ノトキ郭内ニ士卒派出ニ及ハストノ幕府使番回狀左ノ如シ

御曲輪外出火之節御曲輪内屋敷缺付人數不被差出筈候間彌以右之通間遠不申
様に可被相心得候此段寄々無急度可相談之旨西尾隱岐守殿御内々にて被仰聞
候

一中屋敷下屋敷坏へは人數被差越候儀尤勝手次第に可被致候
右之趣爲御届何方へも被申上候決而不及申候以上

正月六日

御使番

十四日加判毛利大藏辭職留任七枚五兩ノ脇差ヲ賜フ老體ニツキ出火ノトキ出場ニ及ハストナリ

十五日井上半左衛門ニ上下一具下付囊ニ密用ニ關シ出府勤勞ニ因テナリ小川源右衛門享保九年ヨリ同十九年ニ至ル物頭勤續ニヨリ羽二重羽織一下付

廿日大島郡安下浦外入兩浦網代葛藤ノ件ニ關シ同郡二老加藤九市郎偏頗ノ處分ヲ爲ス審問ノ結果遠島ヲ命シ給米沒收同役林二郎右衛門代官馬屋原直人及算用方等職務ヲ免シ逼塞ヲ命ス

廿六日阿曾沼十郎左衛門江戸ニ於テ發狂中原治兵衛ヲ殺害セシニツキ歸國ヲ命シ親族へ預付切腹ヲ命シタルモ病死ニ因リ家祿四百石沒收

此月令セラル、ハ去年京ニ於テ行ハレシ大管會ノ儀註上梓セシヲ絶板命セラレキ今ヨリ後朝廷禮典ヲ記セシ書古ク板布セシ外新ニ刻梓スル事停禁タルヘシトナリ

徳川實紀

二月二日ヨリ三月ニ至ル六戸隆家百五十回忌執行ニツキ領地三丘へ使ヲシテ香奠銀三枚下付

五日毛利大藏嫡子毛利七郎初テ公ニ謁ス太刀小馬代小脇差一腰下付

六日ヨリ七日ニ至ル融芳夫人觀光公室一周忌龍昌院ニ於テ修セララル

九日檜崎權兵衛澁谷新五左衛門先代ヨリ繼續乘馬飼養ニヨリ銀二十枚下付

十一日諸臣家業人分限帳肩書ニ關シ伺定左ノ如シ

此度分限帳へ家業有之者の肩書可被仰付段被仰出候に付致僉議候處委敷致讃談肩書仕らせ候へは其ものゝの家督の奉書を根に仕家業斷絶無之様との奉書の文言旁相調へ引合せ候上肩書相成儀御座候付御發駕より内書調候様には御間に相不申候若被差急儀に御座候は、差當り相知候家業の分見渡しを以先肩書仕せ不分明分は逐々僉議仕肩書仕せ可申候右之通見渡しを以差急肩書の様子違候儀も可有御座候自然左様の儀御座候は、追て書替をも仕せ可相濟儀と相見候先年より分限帳關字を置何業と申儀不相知家業人の部に書入候分無給以下にも段々有

之左様の者は猶以急に何業と申肩書不相成部も御座候付旁先右之通可被仰付哉
十六日寺社家官位等ニツキ上京又ハ本山輪番ノトキ借銀願出ニ關シ伺定メ左ノ如
シ

寺社家官位或は傳授其外齋勤等の儀有之致上京又は本山輪番に當り候類の儀に
て借銀願申出候節前々餘分の拜借被仰付候時節も有之一切不及御了簡節も有之
候然は近年御時節柄左様の願虫 食儀にも候へ共時節惡敷虫 食自力に

て難相調段も無餘儀事に御座候依之去春江戸被召登候節申伺候廉の内於寺院洞
春寺以下の御菩提所等御寺格亦は年老に寄乘拂改衣杯不仕候ては難相濟儀も有
之或は本山末寺相互の吉凶に依て諸國一同に格式の諸勤難閑儀も有之或は本山
輪番等も當り前に相成候ては難申理扱亦社家の儀も十八神道の類護摩宗源等の
傳授且社格に應し追々官位昇進をも可被仰付儀虫 食難被差捨事に御座候

へは虫 食近年以夫々に公借被仰付一兩年の拜年分二十貫目餘に當り申候此
銀兼て御曳當も無之儀向後何とぞ引米等の致沙汰其員數を以相成次第に追々無

據分計埒明け申仕與被仰付可然由及 御聞置候因茲去年寺社の引米凡六朱方の
當り割方申付年分十二貫目程有之候然は此銀の員數を高に相定分て無據願の分
遂僉議致校了貸方可申付候尤去年大寧寺儀配列本山輪番に付借銀虫 食申伺
候様縦者先格古銀虫 食員數をは只今文銀十貫目の員數に定猶其内をも一二歩
欠致減少借用可申付候左候て寺社料の多少に依五ヶ年十ヶ年に割付無相違返納
之可致沙汰候元より不差向願分は不及沙汰儀勿論御座候別而無據願と候ても銀
子の高相定事候條彼是相願候共緩急の令僉議差急候願の分計右の員數の内にて
貸方申付相殘分翌年の沙汰に可仕候若寺社欠米被差除御馳走被召上候年の儀は
是等の願大概延引虫 食可有御座候乍去近年虫 食被召上候内にも追々及
御沙汰候儀此度の員數十貫目内外纒の事候條寺社御馳走米の内にて右の員數程
をは分け置せ至極延引難成分へは相應に貸方可相成引當に仕置猶御馳走の趣に
依て至其節申伺令沙汰にて可有御座候惣ての儀右の通に候は、強て公銀の御費
も無之下々願も且々相違申にて可有御座候間向後此通に被仰付可然哉と存候事

廿一日出頭役氏家與三左衛門樂屋奉行秋村十藏姬君誕生ヲ祝シ後房ニ於テ能舞開場ノトキ勤勞アリ銀三枚二枚下付

廿二日馬來宗六先代以來三十五年兵法指南子弟八百人薰陶により銀三枚下付天野七郎兵衛新陰勵精により時服一下付

廿八日家宣夫人天英院薨ス年八十三日不詳今春明倫館石碑ヲ建ツ

明倫館記

今侯立繼修先侯之政戒有司錄庶績申令學宮謹教化其在國也仲春親至學宮祭先聖行養老之事遵奉先侯之道焉而有光矣今年上丁臨學行事乃命學職曰昔者先侯有若令德貽厥孫謀其寵大矣今而不記後世子孫何觀焉其序次創建嘉績以樹學中臣孝孺謹奉命作文其記曰維享保三年戊戌泰桓侯立十一年上奉公朝之休命下率先侯之舊章恭儉躬帥修政慎令肝而食矣於是申命曰嗚呼爾國子弟懋哉勿怠神祖創業文武造士載在令甲我藩國敢弗承守且昔我先侯與汝先祖經營是邦貽茲多福仰思勤

勞不逸寧居爾國子弟進德修業答揚先德否而尸居世祿安逸惟恒淫侈放肆是汝辱而先祖而余亦無告于先侯之靈禮樂射御敬業特敏先侯之訓也懋哉勿怠成德達材以篤爾祐國政就延廣政廣包廣保廣通宣揚令德將順懿美李宗族巨室者老子弟以奉命也是年秋遂命有司興學宮越明年己亥正月告成於是二月上丁始祭先聖四配於學賓者老觀養老之道著為常典世々無替謹按庠序之設將使斯民納乎軌焉者也是以自古以來有土者未之或違允耀史策稱頌盛德而世不絕筆也大東學政載在延熹式自皇都以及列州莫不有學焉春秋祀典取法李唐而內外異制尊卑有等其於教化之法欽崇之意未始不同矣中葉以來國史失官降及戰國喪亂相尋制度陵缺先王之大經大法殆乎熄矣當是時也干戈為政庠廢無聞神祖武成帥諸侯而紀政輒徵林羅山氏咨詢時務於是儒教蔚興海內嚮風爰逮憲廟興學宮飾祀典語見林學士記宗藩三國賀會備土文獻迭顯隆比齊魯其它列侯小國相繼而起往々有河間文翁之稱延天以來於斯為美猗歟盛矣哉我國自洞春公霸西土也聘高倉管子講學三原黃門師足利白鷗洲豐浦參議學別府周徹自此後嗣侯無不有師儒也先臣之敦詩書者有徒矣上之教也且

昔先世世司 皇朝文命以膺斯民也。功烈藏在天府。宜永世蕃昌。保譽命以禮祀于大國也。孝孺承乏儒曹。與佐々木雅真議之。政府規度學宮。注記祭儀。申詳功令。宮成。都名曰明倫館。取諸孟子之言。北爲先聖廟。講堂居中。左爲經籍之庫。右爲廚。廚之西爲齋舍。廩生員。內門外。環以列樹。講武。東爲劍。西爲槍。射圃在其西。旁圃爲講武。經習曲禮。教天文。數學之樹。射圃南。童生學書之舍。大門外。壯士習騎之埒。凡子弟當業而肆者。莫不備設。內衛帥二員。統領學事。詩云。迨天之未陰雨。徹彼桑土。綢繆牖戶。君子若欲綢繆國家。宜莫若學。豈弟君子。民之父母。傳曰。學殖也不學。將落。教之不落。其爲父母也大矣。畏天之威。于時保之。由之以事厥祖。由是以述其職。恭敬之至也。所謂君子有穀。詒孫子。于胥樂兮者。先君之謂也。靡有不孝。目求伊祐者。今侯之謂也。謹記盛事。且錄贊事。有司姓名。以垂後昆云。元文六年辛酉春。

館祭酒山縣孝孺少助謹撰

碑背

加判老臣

宍戶主計源就延

毛利筑後藤原廣政

毛利伊豆大江廣包

桂主殿大江廣保

山内縫殿藤原廣通

八谷五兵衛通春

坂九郎左衛門時存

齋藤又左衛門恒信

長沼新右衛門政安

松田勘右衛門勝正

高原傳左衛門貞久

當職

當役

營作經理

作事奉行

作事方

大工

小工

三月朔日公大書院ニ出坐シ老臣列席一門ヲ始メ諸組諸支配中ヲ召シ諸臣馳走出米去申年ノ如ク旅役米ノ外馳走出米免除スヘキ御意書及老臣添書ヲ讀知セシム其文左ノ如シ

御意書

御家來中不勝手の上度々出米被仰付彼は一統の差詰逮至極候段連々被 聞召上
何とぞ去今年計成とも御救彼成度去春段々僉議被仰付候へとも莫太の御借銀繰
卷難相成に付先去年計御馳走米被差返候然共最初の 御思召に付猶又御儉約御
借銀繰延等の儀種々吟味被仰付當年は去年の通御馳走被差除候大小身共儉約の
儀能々遂吟味取續遂御奉公候心得肝要被 思召候委細年寄共より可申聞候事

覺

御家來中數年打續御馳走被召取大小身共困窮至極の段被 聞召上之別而御苦勞
に被 思召種々吟味被仰付漸去年御馳走米被返遣候寔御救一筋の 御思召にて
諸事被差拾置儀に付引續御馳走被差免候様には難成儀候得共年來の不勝手繰一
ヶ年の御惠行届可申儀にて無之候間御借銀繰卷御儉約の儀をも猶々吟味被仰付
何卒今一ヶ年は旅役出米計にて被差置度の由重疊被成 御意段々僉議被仰付候
處去年繰延の御借銀持越の御買懸且又此内も不被得止臨時の御入用も餘分有之

彼是差淡候へ共大坂表去暮の繰卷乍且々相濟候付而御儉約の儀彌御手を被盡候
御仕組を以御家來中今年も旅役出米の外御馳走米可被差除の旨益御不如意を被
遊御堪忍偏御心入を以右の通候間有難被存大小身共別而被致儉約御奉公可被遂
其節候尤相滯候御借銀御買懸等の捌去年一ヶ年分計にても不輒儀増而兩年相重
り至來年候ては至極の御差問不及申其内當年とても秋作の熟不熟も未相見其外
重き御臨時の御入用又は米穀下直等の儀にて御仕組の積り拔群相違の儀令出來
候ては其償可被仰付御餘計無之事候間萬一變も於有之は至其節被仰懸候品も可
有之候旁能々被相心得兼て其覺悟肝要に候事
附借銀爲納方引米の儀今年も不逮沙汰候事
附旅役出米の仕法並病者幼少御扶持方成出米の儀も去年の通被仰付候事
附愁訴願事被差留其外借銀等の願不逮御沙汰段去年被仰出候通無相違候事
右被存此旨組支配中へも可被申渡候以上

西三月朔日

山 縫 殿

榎 遠 江
毛 宇右衛門
毛 大 藏
毛 筑 後

同日和智六兵衛御鷹役五十年勤務により紋章上下下付
三日諸大名總出仕年號改元の旨閣老臺命を傳フ

德川實紀に曰今年辛酉なれば先規のまゝ京にて前月二十七日改元あり元文を寛
保と改めらるゝよし仰出さる

同日軍法山本藤八數年家業勵精門弟へ傳授完了ニヨリ上下一具下付

四日公萩城發駕

七日萩上野荒神社地ニ於テ山内縫殿中間仁兵衛天野組ノ九郎左衛門ヲ斬リ失踪セ
リ

十五日福原豊後元貞死去使ヲシテ嫡子少輔三郎ヲ弔シ香奠銀三枚下付四月二十八

日少輔三郎へ豊後跡職ヲ命シ高一萬百二十五石八斗七升三合ノ地ヲ領セシム

四月六日公着府

七日閣老松平伊豆守使者ヲ以テ書簡ヲ贈ル去年公發途前假養子ノ願書提出セラレ
シニ切紙ヲ添へ返付セリ公使者ヲ召シ直ニ切紙ノ返書ヲ授ク

十一日林大學頭信光再修武家補任ヲ進呈ス年錄

同日出雲大社修築ニ關シ閣老ヨリ通牒アリ銀五枚公ヨリ三枚諸臣ヨリ三枚寺社在
町分ヨリ寄付セリ

十四日公東親ノ途次大井川滿水ニツキ見付驛滯泊ノトキ晝夜盡力セシモノへ賞與
左ノ如シ

召下上下一具 祖式 左 中

白銀三枚 杉山九郎兵衛

銀子一枚 松原 宇兵衛 増山六左衛門

阿部喜右衛門

銀五兩

伊藤友吉

上田八郎左衛門

厚母宇兵衛

金二百匹

藤野吉左衛門

上川又七

河野十兵衛

褒詞

上山庄左衛門外九人

十五日毛利甲斐守匡敬後重始テ入部ノ暇ヲ賜フ五月二十三日長府着

廿一日邸内風紀ニ關シ訓示左ノ如シ

覺

一足輕以下又家來の中間小もの等御式臺前無據罷通候節は抜入袖其外慮外かましき體にて罷通間敷段は前々以被仰出候得共彌以無據罷通候節は隨分謹而罷通抜入袖其外慮外かましき體或は人に行相立とまり雜談懸咄或はされ狂ひ等不仕尤御客御使者等無之哉先見合萬一御客御使者等有之節は不能通差控御客御使者相濟候以後可能通候惣而御式臺前不作法無之様下々へ手堅可被申付候

若向後右體のもの於有之は被逮御沙汰主人も可爲越度候事

一小屋々々矢切へ猥に干物有之見苦敷儀に候就中御本門左右小屋々々矢切の儀は御式臺より見入申儀候間矢切へ干不申かけ出しの椽へ干可被申候其外小屋々々矢切に干物の儀も御屋敷内御末家様方其外御旗本衆他所人往來有之儀に候へは見苦敷品々干不申様に下々へも手堅可被申付候事以上

酉四月

廿四日毛利但馬守廣豐嫡子松次郎德山ニ於出陣嫡子トナル公許ノ通報アリ

廿七日幕府取退無盡停止ノ訓令アリ大目付同狀

日不詳當役榎本遠江矢倉方坂九郎左衛門ニ對シ取締ニ關シ訓示左ノ如シ

一御手前支配の御用方役人中別而行規作法能在江戸御法度の條々宜相守候様に兼て可被申候事

一自用切手の外御用に付被差出候分夜に入候節は付變の儀前々の通可有沙汰候尤御用と候ても及深更候儀は稀々の儀たるへく候條無據付變相成候共隨分無

、緩せ御用相仕廻不及遅滞罷歸候様に是又兼て可被申付候

一御用方役人中の儀はいづれも御勝手向へ懸り候御役筋の儀に候御時節柄其心得肝要の儀に候間面々身に引請萬端御費の儀無之様無緩可有心遣候 御前より被仰出候御用物並御用所記録所其外より沙汰相成候御用と候ても其所の役人事品によつて是は御勝手是は御不勝手と申存寄の差引有之候は無遠慮檢使衆申談何分御手前迄申出差圖を請可成程の儀は少にても御物入令減少候様に心遣可仕旨兼て能々可被申付候事

一先御番手御所帶御仕與に付諸役所年中行事小積帳調被仰付候右の小積帳にて其役所年分諸入目高の儀は不及申御用物調方の次第迄委細相見申事に候然は引請の役人常に令熟覽候は、兼て心遣工面にも可罷成候條此段能々可被申付候尤右の年中行事御用物夫々にて直積り委細の目安相成候付銀高は上り候様に相見候へ共諸物ゆり合候ては相調可申事に候第一御番手御入目高の御引當有之儀に付右小積り帳の内一二割方の儀は兎角令減少候様に無之候ては御引

當令不足事に候間其心得を以随分勘辨の心遣無緩やうに可被申聞せ候

附御算用方諸役所現御入用の月括りの儀右の小積り帳辻を以増劣りの差引可被申付候

一御算用方の儀は定役人の儀に候へは役所の御仕法旁聊相違可有之儀にて無之候へとも御勘定しまり旁其心得肝要の事に候間猶又相改諸事無緩其沙汰可被申付候

附御家頼中在江戸御勘渡を引當無據暫借等の口入仕候共兼ての御仕法も有之事に候へは其筋無相違不詰の儀無之様に兼て可被申付候

一御銀子方の儀大段の御銀子諸拂肝要の儀に候間随分入念相勤候様に可被申付候尤兼ての勤方緩せ有之候へはおのつから内勘上勘の滞にも罷成事に候間役筋日夜無緩相心得候様に兼て可被申付候

一吳服方濃物方の儀は諸御進物仕出所の儀は第一御慮上の儀は不及申其外他所へ懸肝要の儀に候其所引請の役人下手子に至迄身に引懸随分入念懸り相の諸

役所乞合間違無之様に心遣仕候儀肝要に候萬一間違の儀有之たとへ引請の役人申わけ相立他の役所の仕落に相成候ても他所へ出候ては御外聞不宜候條相互に可成程は氣を付乞合入念随分間違無之様に兼て心得肝要に候事

附御藏に有之公物手置の致方によつて及公損事に候間随分損物無之様に節々見分無緩様に可被申聞候

一御作事方の儀引請の役人心得によつて御物入の多少可有之事に候間萬事御費の儀無之様に工面心遣可有之事に候尤御屋敷内不絶見分いたし小破の所有之候は早速御手前へ申届大破に不及様に其心遣肝要に候事

附御奥記録所其外より時々申來り候小々御用物の儀御用所より切懸辻を以て調候様に可被申付候尤差急候御用申來候は、先相整追而切懸を取候様に可被申付候

附小屋々々取繕の儀小屋主より相頼候共私の心得を以相調申聞敷候尤御屋鋪内見分の節見當り候破損有之其分にて差置候ては及大破候所有之候は早速

相調可然候事

附諸所に有之火消道具不及減少肝要の節御用缺不申様に常々見分可有心遣候事

附麻布御作事の儀御上屋敷より相阻り御屋敷も御無人の儀候へは諸事に付御作事方役人の心得肝要の儀に候間不絶御屋敷内打廻り心遣仕候様に可被申付候御殿廻り其外共に近年及破損候へはかきと御取繕をも被仰付度候へ共當分御仕出難成自然と修理に怠り申事に候間節々見分の上可成程は風雨の節不及大破やうに心遣緩有之間敷候且又火用心の事足輕共打廻り無間斷尤御目付所よりも無緩沙汰有之儀候へ共御作事方よりも別而入念候心得肝要到候尤近火之節防方の用意をも心懸火消道具等の仕配旁兼而致覺悟萬端令心遣候様に可被申付候

一中取方の儀は諸御用物買方肝要の役座兼ての御仕法有之儀候條其筋無相違様に可有心遣候尤町方へ節々罷出現買物仕候儀御仕法の第一に候間可成程は節

々町方罷出買方の吟味無緩様に可被申付候尤御手前事も折々中取方被罷出無緩様に其沙汰可被仕候事

一御用方役人御出入諸町人の青物酒飯等の儀は兼而被相制事に候へは聊相違可有之儀にて無之候へ共彌以其慎肝要の事に候就中中取方の儀御用聞中は不及申於于時買方仕候者に目當申役所の儀に候へは御用聞其外共に御用物の善悪直段定入札物等の儀におゐては親疎の差別なく廉直の筋を以何分御勝手宜やうに相心得候儀專要に候事

一矢倉人遣所の儀筆者役並人遣の者人懸差引の致方によつて御物入莫太の多少有之と相聞候依之當御番手檢使役被差出儀候間愈以無緩差引吟味可被申付候將亦御中間以下の者仕役の儀古法不及混雜やうに可被申付候若及混雜候者有之候節人遣所の了簡を以相當の仕役令宥免候所より御持方不宜手明の者令減少町夫の御やとひ及大段莫太御費の事に候尤仕役堅固に相勤抽神妙の者於有之は被申出心得の者有之候は、是又速可被申出候

附諸役所共手子付候者古法の人數相増不申様に可有沙汰候御儉約に付先御在府改有之候間其辻無相違やうに可有沙汰候

一諸役所おゐて差當候儀有之時は御手前了間も難相違事たるへく候間檢使衆存寄を請何分申談御勝手宜遂其節候様に可被申聞候尤右の存寄落着難成儀におゐては御手前申達差圖を請候段勿論たるへく候事
右之趣を以可有沙汰候以上

寛保元酉四月

坂 九郎左衛門殿

板 遠 江

日不詳當役板本遠江檢使役ニ對シ訓示左ノ如シ

一檢使役の儀は御用方諸役所見届被仰付重き役筋の儀に候間同役中被申談別而行規作法能在江戸御法度の條々宜相守諸事堅固の覺悟可爲專要候事

附役人同道他出の節御用隙取無據夜に入候共無緩御用相仕廻可成程は時刻不及遲滯様可被罷歸候事

一大檢使の儀は諸役所共に見分勿論の儀候へ共別而大納戸御臺所中取方肝要の儀に候間何分存奇の筋於有之は役人へ氣を付御爲宜様に可被相勤候

附御臺所の儀は日々の御入用大段の事に候間随分御費無之様常々被致吟味御臺所頭並役人中へも無遠慮氣を付被申談其沙汰あるへく候御臺所定檢使並積り方被仰付候儀は先年御仕與付定役被仰付たる事に候へは別而御費の儀無之様物毎吟味仕候儀役筋の儀に候間其心得を以被致見分行届不申儀有之候は、氣を付可被致吟味候將亦御客等別而御繁多の時分は遠近付檢使の内被乞請諸所の見届無緩様に可有沙汰候

一遠近付檢使衆の内中取方御作事方人遣所の儀は一人宛引退被仰付候間引請役所の御用筋常に能々勘辨被仕存奇の筋於有之は役人へ氣を付何分御勝手能様に可被遂其節候事

一大檢使並遠近付檢使中共に都合一致の心得を以常々申談諸事廉直の筋を以可被相勤候檢使役の心得によつて還而御用相滞申儀も有之と相聞候間其差別能々被相心得尤無遲滞出勤被仕退去の儀も見届之しまり旁入念諸事無緩怠様に心得專要に候將又時々御買上の御用物善惡物數直段の高下諸公物請拂のしまり旁役人中其疎可有之儀にて無之候へ共事々物々能々僉議を加へ存寄於有之は無遠慮被申談何分御勝手能尤御用不及遲滞様に可被遂其節候事

附勤方の儀同役中被申談萬一存寄區々の儀有之候は、御用所各中被申談何分物筋宜相決可被遂其節候就中新役の衆同役中被申談候儀肝要に候事
一矢倉御用方中勤方心得の儀に付此度書付を以令沙汰候條於檢使中も可被存其趣候事

附先御番手被仰付候諸役所年中行事小積帳にて其役所々々年分御用の大格申事に候間於檢使中も兼而被存其趣可有吟味候事
右の趣能々可被相心得候尤諸役所の趣役人勤方の趣に付存寄の儀有之におゐては先密に可被申出候何分吟味の上可及其沙汰候以上

寛保元酉四月

六月二日御供頭公議人添肩絹役書院小性ノ御傘役公登營及上野増上寺佛詣閣老其他供從ノトキ羅紗雨羽織着用ヲ免許ス御留守居役公務外出ニ限り羅紗雨羽織ヲ免シ火事羽織ハ從前ノ通タルヘシトナリ

廿四日雲谷家繪師野口源次郎家續ノ嗣子ナシ養子ニテハ流派違ニツキ指南ナリカタキニヨリ稱號ヲ栗栖ト改メ狩野流ニ變更ノ請願ニ許可ヲ與フ

廿九日御船手村上圖書病アリ職務ニ堪ヘサルヲ以テ療病中嫡子ヘ代役ノ乞願ヲ許シ嫡子式部ヘ組支配代役ヲ命ス

檢使役河内山新兵衛ニ對スル訓示ハ前記矢倉方坂九郎左衛門ニ訓示ト大同小異ヲ以テ略ス

七月朔日當役榎本遠江矢倉頭人ニ對シ訓示左ノ如シ

覺

一諸職人町夫等人懸けの儀翌日の仕役人積旁檢使役へ申談相調諸事御費無之様人掛可相調候事

一檢使其席に居合不申候は、人積配當の趣書付を以て連相談檢使存寄も候は、無隔意其趣申談増減の吟味可被仕候

一木切レこけら等儀市中へ賣拂候外作事方會所門外へ一切被差出間敷候事

附御用に不立物の義は檢使見分を以市中へ賣拂可被申事

附作事方小屋の義は多人數入込晩々には湯洗等も有之事に候條檢使方へ申

談檢使了簡の上木けらかななくす等は前々の通たるへき事

以上

右の趣締り好可有沙汰候此度改而檢使へも被仰渡候條少にても不締り御費の儀無之様可有沙汰候若不心得の筋於有之は可被及御沙汰候事

寛保元酉四月

二日自今御供頭公儀人添肩衣役七夕八朔白帷子着用免許セラル

五日島田貞右衛門ニ明倫館本締役ヲ井原四郎左衛門ニ御中屋敷檢使役ヲ藤井七郎

左衛門ニ麻布邸檢使役ヲ高橋八郎左衛門ニ宇田川夫人檢使役ヲ命ス

十六日兒玉豐前御留守死去使ヲシテ嫡子主計ヲ弔シ香奠銀二枚下付

廿三日船木宰判代官役吉崎作右衛門辭職ヲ許シ銀五枚下付曩ニ大島郡代官役中否起シ地下小貫減少當宰判風俗改良且檢見新開畠田成否起シ等ニ關シ公益ヲ増進シタルニ因テナリ

廿九日ヨリ晦日ニ至ル養心夫人三回忌青松寺ニ於テ法會修セラル銀十五枚米十五俵納付八月九日ヨリ十日ニ至ル大照院ニ於テ法會執行銀十枚米十俵寺納セラル

八月七日吉宗將軍右大臣ニ任ス世子家重大納言右大將兼右馬寮御監ニ補ヌ十二日大納言ノ世子家治代元服即日權大納言從二位ニ叙任セラル於是公列侯ト皆登營拜賀獻物如例

十五日德田幸助東帶一卷用務命セラレ若勞ニ因リ召下吳服一下付

廿四日江戸老臣ヨリ文武師家ニ對シ訓示左ノ如シ

大組へ被相加置候文武の師組並諸役平士同様に被仰付候へ共江戸御番手に被召仕候ては留守中弟子指南及懈怠申事に付旅役には難被召仕儀尤明倫館稽古日に

あたり候節は御城御番をも被差除館中出勤被仰付候段只今迄の御沙汰筋に候彌以自今以後文武の家業人江戸御番手には堅不被召仕館中稽古日には御城御番をも被差除儀に候間無懈怠弟子指南可仕候家業稽古の筋には候へ共毎々種々の申立を以江戸罷登剝永詰等仕候ものも有之候へ共各別其謂も不相見甚以不宜儀に候然れ共家業稽古爲修練難差置理至極の筋におゐては此後とても僉議の上被遂御許容にても可有之候へ共家業稽古の申立各別の譯も無之候ては一向不逮御沙汰候まして準がましき不心得の願仕間敷候尤上の御用に付江戸番手等被仰付候人柄は前々の通制外の儀勿論に候事

酉八月

廿七日去ル四月十八日東叡山境内寺院瓦葺改造ニツキ閣老ヨリ列侯宿坊へ助役ノ事ニ關シ書付ヲ授ク因テ吾藩宿坊圓珠院へ作事奉行坂九郎左衛門棟梁松田甚左衛門遠近檢使津田六郎右衛門作事方小川嘉右衛門以下是日ヨリ派出シ修繕ニ着手十二月六日ニ至リ竣成工費銀四十九貫五十二匁八分二厘ナリ

廿八日家具方櫻井善左衛門江戸在勤中公ノ好ヲ以テ作ラレタル諷番組盃五箇ノ内
二箇紛失ニ因リ逼塞ヲ命シ將來家業ノ外公務ヲ命セストナリ
九月朔日記録所出頭役原權左衛門矢倉方坂九郎左衛門ニ姫君居邸取締ニ關シ江戸
老臣ヨリ訓示ス其文略ス

七日國內犯罪人ニ關シ地方老臣ヨリ江戸老臣へ伺書左ノ如シ

覺

御國中にて盗人其外惡事仕追放申付候末々の者共立歸又々惡事仕候儀毎度の儀
に御座候其内郡退者御國中御塞りの者等立歸候へは遠島又は三度に及び立歸候
時は前々より斬罪被仰付儀に候へ共其者共の目印無之候付御仕置輕重の沙汰も
行届不申儀に御座候間科人の身内不差顯所へ入墨申付候は、立歸候節穿鑿仕能
可相成候尤脇々の儀をも去年井上半右衛門其元被差越候節開合申付候處に外様
にも有之儀差當本多中務様にも入墨被仰付候由井上又右衛門より承候由申越候
然者郡退者御國中御塞りの者兩様に入墨の品を替申付度存候元より達 御聞御

仕置被仰付候筋の者にて無之候故きつと相伺候儀にては無御座候へ共新規の事
に付及御相談候

右御在國の内致御相談及 御聞候處に長府徳山岩國へも申遣御國中一統に相成
候様可致沙汰旨被仰付候依之長府徳山岩國申達候儀途吟味候處前々より格式有
之儀は申達否も無之儀候へ共無左儀は御同様に難參趣に御座候差當近年札遣重
き通用の事に候へ共御本手領に限り長府徳山岩國へは其沙汰も不被仰付候此度
の儀近年の趣に候へは長府徳山の儀は被仰達左様も可相成哉に候へ共岩國には
先格無之儀請不申段持方に被仕事に候へは必定被得其意間鋪候左候時は申懸還
而いか敷其上御本手領御配地廣狹其違莫太の儀に候へは御仕置の名目同様に
は相成間敷儀旁長府徳山岩國の儀不及沙汰御本手領計の沙汰に被仰付可然哉追
々差向候者も就有之及御相談候於其元も被遂御吟味今一往被及御聞候様にと存
候

廿三日毛利甲斐守匡敬へ慰問ノ爲メ御鷹ノ内鶴二居贈ラル

同日所帶方石川彌右衛門辭職ニツキ銀十枚下付數十年精勤ニ因テナリ
廿六日雁鴨饗應ノ料理ニ關シ大目付回狀左ノ如シ

雁鴨振廻の料理に出候儀無用可仕旨先年相觸候得共向後押立候振廻に十月より
三月迄は出候儀不苦候間此段可被相觸候

十月三日有隣軒死去養心夫人。鷹司關白兼源養女。實兼源江戶三郎萩山口三田尻鳴物
停止三日間

十五日京都へ使者ヲ遣シ鷹司一條兩家ヲ弔シ有隣軒靈前へ香奠銀五枚納付セシム
廿二日攝州打出村新王寺ヨリ阿保親王九百年忌ニ相當ノ事大坂留守居へ申報アリ
依テ大坂檢使粟屋權兵衛ヲシテ代拜セシメ香奠銀十枚納付セラル
日不詳御裏御部屋へ檢使役付セラレタルニツキ江戸當役訓示左ノ如シ

覺

一御部屋方の儀は前方も檢使役被差出候處に其後御引せ被成御取次役兼役被仰
付候へ共此度各別に檢使役として被差出候儀條萬事無親疎申談御爲宜様に可

有沙汰候事

附御部屋方の儀は兼ての御格式も有之事に候間諸事御方申談所勤可仕の通
檢使へも手堅申付置候事

一御臺所一卷の儀は諸事御算用方引請の事に候へは御時節柄の儀旁入はまり
彌御費無之様に檢使役申合小々の儀迄も萬事心遣途其節候様に可被申付候事
一御朝夕三度の御膳分は不逮申御客向其外於于時御懸相等御料理方積りの儀
御膳夫心得にて御入用莫太の増減有之事に候諸事小々の儀迄も無親疎檢使
方申談所勤可有之通此段御膳夫へ能々可被申付候事

附御養方心得是又肝要の儀候條右の趣御算用方御膳夫より能々申付候様に
可有沙汰候事

一御買物方役人勤方によつて過分の徳失有之儀に候御表中取方仕法も有之候
條連々承合買方の仕法其形に相叶尤不絶檢使役同道にて町方へも罷出時々
惣場直聞等仕可相成程は直買に被申付諸事檢使役申談令一和相勤候様に能

々可被申聞候事

一御部裏方にて人造の儀肝要の事候條隨分申合御入劣り有之候様に可被遂吟味候事

右此度檢使役御付被成候間諸事無親疎申談被相勸尤諸役人中へも其段能々可被申聞候事

寛保元酉十月

榎 遠 江

各紙御部裏老中屋敷國司與一右衛門
宇田川重五郎兵衛

御中屋敷檢使井原四郎左衛門麻布邸藤井七郎左衛門宇田川邸高橋八郎左衛門ニ對スル訓示ハ前記裏老へ訓示ト粗同文ナルヲ以テ略ス

十一月九日檢斷頭河野彌右衛門七月入獄ノ囚徒今回出獄郡退セラルヘキヲ九月ニ放免セシメタルハ職務懈怠ニヨリ逼塞ヲ命ス

十五日及十八日公開老其他衆賓ヲ招テ饗應セラル幕府三公ノ官位叙任ヲ賀セルナ

同日三十人通林二郎右衛門大島郡網代葛藤ニ關シ不法アリニ老役免セラレ地陸ヨリ三十人通ニ降等軍貝家業ヲ命シ修練怠ナカラシム

廿三日尾寺長左衛門ニ金五百匹境七郎兵衛ニ金二百匹下付公巡國用務ニツキ出府命セララル、ニ因テナリ

廿八日領國內春來洪水風雨損害ノ景況幕府上陳概略左ノ如シ

一高一萬九千七百九十三石餘

一倒木四百三十八本

一橋損五十四所

一高札場六所

一倒家九十九戸

長府領 洪水、蟲枯、穂枯等

一高九千八百五十三石八斗餘

一山崩百十七所

一落橋十八所

德山領

一高七千二百九十三石餘田方風雨被害高五千八百二十石、田方水害高五百五十三石餘
清末領洪水、蟲枯、穗枯等

一田島高千五百二石一斗五合

一川土手崩三十九所

一山崩三十一所

一土橋落四所

此月寺院訴訟ノ制發令左ノ如シ德川十五代史

一諸宗之寺院、本末論、或録役座階、法系、住番、世牌等、其外法儀に掛り候公事訴訟は、其録所觸頭本寺等にて、逐一途吟味、依怙最負無之、可令裁斷事に候。申付を致違背、不相請候は、各可申付候。其上にも及難儀候者は、奉行所へ可差出候吟味之上、急度可申付候。尤他宗又は俗人へ懸り候出入は、只今迄之通添簡を以可差出候。

右之通諸宗一統可相心得候。

十二月六日醫業中村庸軒家祿加增高ノ内五十三石二男左三郎へ分知ノ請願ヲ許シ大組ニ加へ平士ニ奉仕セシメ、殘石五十三石外銀二貫目給與業務ヲ怠リナカラシム。廿八日消防ノ制發令左ノ如シ大目付同狀

火事の節近頃は馬上の火元見多出候向後馬上の火元見差出候儀は無用に候勿論、消防の障りに成候間火口へ乗込申間敷候事

一火消の大名往來の節横切通候者は相待候故途中の障りに成候向後人數の間を所々切候而往來候様主人々々より可申付置候事

右之通可被相觸候

酉十二月

寛保二年壬戌正月公江戸邸ニ在リ

十一日毛利讃岐守政苗松平忠雅女へ納采ノ禮ヲ行フ十五日婚儀ヲ舉ク

十二日遠近檢使大納戸手子役人御殿番御中間御中間頭へ對シ當役訓示左ノ如シ

覺

一麻布御殿其外破損に付去夏以來修復被仰付令成就候然處先年より御中間の者三人爲御殿番被差置候へ共掃除等の儀は不及申御家破損等の儀も時々氣を付申出候筋にても無之打過候付小破の中取締も不相成甚御持方不宜候故向後は御殿中居籠の役人被仰付御殿中並御庭掃除の仕法此度改被仰付左之通定被置候事

一御殿記録所の後御用所入込

遠 近 檢 使

但入込被仰付御殿内惣掃り火用心等別而念入氣を付尤毎月三度宛相定候大掃除日の節見合且又御殿破損所有之節は令見分其趣櫻田申出候様に可仕候事
一大御臺所後輪御納戸の方をかこひ入込

大御納戸手子役人

右入込居火用心別而念を入毎月三度宛相定候大掃除日の節見合可仕候事
一御步行番所西の妻休息部屋へ入込

御 殿 番
御 中 間

但火用心第一の儀候條常々念入可申候且又右三日の大掃除日の外日々御殿内掃除無怠可相勤候事

一御殿内不殘御庭廻掃除日毎月

九 日 十九日 廿九日

但小の月廿八日

右三日の内雨天の節は前後へ寄せ天氣能時分掃除可仕候事

一老中固屋の内臺所の方入込

御 中 間 頭

右入込居惣掃り火用心別而念入毎月掃除無怠見合破損所有之節は檢使役へ

申達時々無緩櫻田へ申出候事

右之通此度御殿其外修復相成候得共只今迄の通にて掃除等も怠り入籠の役人等無之候ては御殿内破所の申出も無之不相濟儀に付仕法被相改入籠の役人被仰付毎月三日宛大掃除日被相極候條前書の趣を以銘々無緩氣を付御座敷内御庭廻の掃除能々可被申付候左候時は殿様不時に麻布被爲入候節も御殿へ被成御座候様にも相成儀に候條其心得を以諸役人へも申傳前書の筋後年共に無相違可被相心得候猶又委細の儀は別紙書付を以申渡候間可被得其意候以上

寛保二戌正月十二日

同日毛利讃岐守結婚ニ付キ銀五十貫目助力ノ請願アルモ許可ヲ與ヘス錢別トシテ金二百兩毛氈二十枚干鯛一箱進セラル

十五日矢倉頭人麻布邸在番檢使へ當役訓示左ノ如シ

覺

一麻布御屋敷之儀別に無之御下屋敷何時御用に可有之程も難計肝要御變屋敷の

儀に候處御殿廻り御長屋ともに修補に怠り自然御用に有之候ても難相調體に付近年の内追々に成共御修復被仰付度儀と相見候依之右の御修復料先近年の内年々少宛にても御増送り相成候様と去春御在國の内及相談尤右の趣及御聞候左候而御參府の上御修復の次第令僉議候處に内外御長屋共に大破候へ共御殿廻り分別而及破損當分も難被差置に付去夏以來小書院御陸番所記録所廻り御膳場御納戸御臺所廻り中仕切御長屋共に都合五百坪餘の所御修復相成且火用心爲旁瓦葺に被仰付候然處に後年常住の御持方掃除等に怠り打捨置候ては明家の儀に候故別而破損強有之事に候依之御殿守護として御屋敷在番の檢使並大納戸手子御殿の内兩所に居籠り被仰付候左候而守護役内外の掃除等引請候儀は檢使役より兼役に被仰付候尤御屋敷廻り御殿御長屋ともに御作事方より諸沙汰仕候儀は前々の通に候條麻布御作事方於役人も御修復等の儀は勿論常々掃除等の儀も引請怠り無之様に可有沙汰候事

一御殿番として御中間の者三人晝夜二人宛前々の通御殿相詰並定掃除番二人被

付置候事

附御殿番御中間勤方の儀は御殿内疊敷候所無怠掃除肝要の儀候板敷にて被差置候所とても不絶掃除可有之候左候へは疊敷候所は兼而間切を三仕切に定必二日置に掃除仕疊不敷所の分は十仕切程に境を立置九日置に掃除相廻候様に可被申付候且又坪の内小庭御書院御座之間御庭廻り且御式臺前より中之口御臺所廻り内圍ひの内掃除の儀是又十丁場程に物切を立置九日置に掃除相廻り候様掃除番の者へ可被申付候

附御殿廻りに付候生垣摘立植繼御庭内芝刈立御植木の手入等迄も見計ひ無怠様可有沙汰候

一右之通御殿内外ともに物切を立日々不怠掃除被仰付候上格別大掃除にも不及儀と相見へ候得共常々御用に無之場所の儀に候へは彼等共に任せ被置候ては掃除の致方荒増怠り可申儀に付一ヶ月三度宛大掃除日定被置候條御殿守護役の儀は勿論御作事方役罷出尤御作事方人遣ひ所有合の人数取合召連罷出守護

役の存寄を請申談天井小壁相よりはきおろし戸障子の棧かまち等をもはき御庭廻り坪の内小庭等水はき溝さらへ等迄時々見分の上無怠申付候様に可有沙汰候事

一右一ヶ月三度大掃除日には御殿内不殘戸障子を明終日風を入晩方に相成戸障子を締候様に可有沙汰候事

一風雨等の節は守護役の儀は勿論作事方役人罷出致見分破損所吹込等見分仕夫々に應し宜様可有沙汰候事

一御殿内火用心の儀別而肝要の段勿論の事候御持方のため殿中居籠り被仰付候處火之元の用心に怠り若萬一聊の儀も有之候ては甚以不相濟事候依之手付等の人数有之役筋を以入籠り被仰付儀に候條御付の者下人共へも兼而其譯手堅念を入申付尤面々不怠氣を付候儀肝要に候事

一埋御門東脇に有之老中小屋の儀此度御修復瓦葺に被仰付候此木屋の儀は自然の時分 上々様方御除御殿にも相成儀候へは常々の御持方御殿内同様の儀に

候依之御中間頭居籠り被仰付候條御殿内外掃除等の並を請無怠相守り候様可有沙汰候是又火用心等の儀別而肝要の儀に候右小屋の儀は於于時自御國御一門老中の内被召登候節暫時小屋にも可相成候左様の節は御中間頭の儀は只今迄の小屋へ引退被仰付儀に候事

一御殿の内御式臺御書院御座之間並御次廻共に此度瓦葺に不相成所追而御修復被仰付候節は何とぞ瓦葺に相成候様沙汰有之可然儀候且又外輪御長屋御本門より東の方御長屋内輪別而及破損候條近年の内下廻り立修復瓦置替底の分瓦葺に相成候様に有之可然儀に候事

一内長屋打廻シ六十間有之分別而及大破候條是又近年の内立修復瓦葺に相成可然候其外内長屋の儀も追々及破損葺替差向可申候條其趣に随ひ追々御修復尤瓦葺に相成可然儀に候事

右之趣宜被致承知廉々無怠様に可有沙汰候尤御役入替りの節は念を入可被申傳候以上

寛保二戌正月

榎 遠 江

矢倉頭人 坂九郎左衛門殿

麻布御屋敷
在番檢使 河内山新兵衛殿

十八日毛利但馬守三男三助江戸ニ於テ死去江戸三郎並萩地三日間鳴物停止

同日目付役市川三右衛門ニ宇田川夫人裏老ヲ物頭役國重九郎兵衛ニ目付役ヲ命ス

廿八日手回組足輕使用ニ關シ訓示左ノ如シ

御手回組足輕御遣方の儀に付先年以來度々御書付被差出候へ共毎々下の不心得を以勤方令難澁候且組頭におゐても心得違有之候ては組中への押も不得仕不心得の申立仕急場の節は御間闕候筋にも至り甚以御持方其通にて不相濟儀に候惣而足輕共不心得の申方は頭々の心得にも可寄事に候條前々被差出置候御書付之趣能々令僉議得心候て下々も理非相分り候様に申聞せ我意を立候仕形有之間敷段不能申候差當り享保九年辰十二月被差出置候御書付にて御仕ひ方の儀明白に相極居申事に候此上無筋申立を以御役及難澁候は、足輕共の儀は其品によつて

急度被相答趣に依て組頭の越度に可被仰付候條先年被仰出置候筋兼々組頭並組中共に能々相心得居可申候事

寛保二年戊二月

此訓示ニ享保九年辰十二月二日ノ訓示ヲ添へ發布セリ

二月十日外向供從ノトキ行規ニ關シ訓示左ノ如シ

外向御供に罷出候面々行規念を入候段不能申候就中御振廻先にて御供中御座敷へ上り居候時分は表番頭御書院役平番共着座の筆並不令混雜やうに前々よりの趣も有之且又御馳走等被差出候節も荒増の仕形無之又は火鉢等被差出置候とても着座を立崩し火邊へ集り雜話等仕間敷段改被仰聞に不逮事に候然處に着座の儀も流例と違ひ致混雜火邊へ集り銘々内輪の雜話など仕候面々も有之由相聞甚不心得の事に候就中番頭御供の節は右體の不心得の衆有之候共差押可申段勿論に候向後彌以銘々行規能相慎猥に雜話等不仕様に御組其外支配の内にては御供に罷出候面々へは急度能々可有御申聞候事

寛保二戊二月十日

十一日赤坂溜池端大下水道浚渫費出銀高割松平安藝守ヨリ通牒アリ吾藩ハ全祿半高十八萬四千七百石分此ニ對スル出銀六百五十三匁八分三厘三毛ナリ

同日井上源右衛門失踪ニツキ高四十三石沒收

十三日ヨリ十四日ニ至ル融芳夫人三回忌天德寺ニ於テ法會修セラル銀五十枚納付三月七日龍昌院ニ於テ法會執行米十俵銀七枚寺納セラル

廿一日町奉行島尾五郎右衛門ニ時服二作事方生田伊右衛門ニ時服一銀三枚檢使坪井彌右衛門ニ時服一金一兩下付萩城三郭城浚渫數日ノ勤勞ニ因テナリ

廿二日大津郡通浦失火人家百十二戸全燒

廿八日吉井治兵衛武藤九右衛門福島幸助數年近侍勤仕ニヨリ各銀七枚下付麻布郎番醫小川宗順申歲以來自費ヲ以テ勤務ニ因リ時服二下付

三月六日屋敷相對替願ニ關シ大目附回狀左ノ如シ

屋敷相對替相願候節當時拜領仕有之候屋敷何年以前致拜領候と申儀向後相對

替願書へ書加差出候

右之趣向々へ可被達置候

三月

八日大組物頭楊井七兵衛唐船掃攘方法ニ關シ唐船方ノ指揮ニ背キタルニヨリ逼塞ヲ命シ辭職ヲ許ス吉村十郎左衛門ニ後任ヲ命ス

廿三日德山進性院死毛利飛騨守側室日向守實母

四月十一日直目付井原藤兵衛ニ歸國ヲ命ス當職山内縫殿留任財政整理ニ關シ山内縫殿御留守居毛利筑後毛利大藏裏判粟屋勘兵衛へ傳命書及本年秋公巡國ノトキ甚大ノ費用ヲ省キ民間ノ疾苦ヲ生セサルヤウ又櫻田邸式臺改築等審議ノ爲ナリ

十五日公歸國暇ヲ賜フ

同日大納戸奏者役諫早彌二右衛門公歸國途次伊勢神廟へ代拜セシムルニヨリ上下下付

十八日諸國寺社修理ニ關シ寺社奉行連印ノ勅化狀携帶セシトキハ勅化ヲ許スヘキ

ノ旨大目付回狀アリ

廿一日公江戸發程二十五日日光山ニ過キ東照宮ニ參謁太刀馬代銀十枚納付木曾路ヲ經テ歸國ノ途ニ即ク

廿四日毛利但馬守第四子松次郎嫡子成ノ公許アリ

廿五日氷上山東照宮再築竣成遷宮式アリ

廿五日ヨリ二十七日ニ至ル有章院殿將軍家驛二十七回忌増上寺ニ於テ法會執行香奠銀五枚納付二十八日ヨリ二十九日ニ至ル氷上山眞光院ニ於テ法會修セラレ

廿七日毛利甲斐守匡敬着府

同日益田越中元道死去香奠銀三枚越中後室へ下付

此月寺院ニ令シテ六道錢ヲ禁ス令文左ノ如シ德川十五代史

一世上葬禮之節金銀錢或は六道錢土中へ埋捨候事無益之儀に候然共俗習之儀急に難相止可有之に付其所之寺院より右無益之道理寄々且方共へ説聞せ向後土中へ埋候事相止させ候積り右之通町々へ申聞せ相止候様可心得候

五月三日江戸加判毛利宇右衛門廣規江戸ニ於テ死去去年五十嫡子宮内へ香奠銀三枚下付

十一日毛利主水正師就第二子多賀之允毛利讃岐守政苗假養子請願許可アリ

十三日公歸國途次伏見ヨリ宇治ニ入り黄檗山福萬寺ニ至リ龍統和尚ニ會見ス龍統和尚

ハ前年東光寺ニ住職セシ由緒アルニ由テナリ

廿五日眞壽院死去吉元公姉南部備後守久信室今ノ南部修理大夫祖母ニテ宗廣公父

方ノ伯母ニツキ定式ノ忌服ヲ受ケラル江戸三郎及國內鳴物停止五日間

六月朔日公歸城禮使國司内藏ヲ出府セシム

四日加判役毛利大藏辭職留任多年ノ功勞ニ因リ三田尻田島ニテ拜受ノ開作過半竣

成石高未定ナルモ其收穫ヲ浮米ニ替ヘ下付セラレ

十一日大和伊織近侍ニ採用與番頭格トナス兒玉與右衛門ニ林木工代リ番頭役ヲ手

回物頭役小川源右衛門ニ法林夫人裏老ヲ目付役三浦七兵衛ニ心涼院裏老ヲ使番山

田宇兵衛ニ目付役ヲ命ス

十二日筒井源三郎後河野右内ニ改ム母子ノ勤勞ニヨリ新規採用五人扶持銀二百五十目下付

十四日記録所日帳方境五郎左衛門辭職ニヨリ銀百目下付

十五日記録所出頭役乃美藏人上山庄左衛門辭職留任藏人へ野方召羽織一庄左衛門

へ染帷子一下付

十九日諸司代土岐丹後守閑老ニ任ス使ヲシテ太刀一腰馬代黄金十兩箱肴二種贈ラ

ル

廿一日熊谷七郎兵衛ニ唐船打拂根知役ヲ命ス

同日毛利宮内ニ家督ヲ命ス

廿四日豊姫宗廣公息女天ス三歳法名香善院江戸天德寺ニ葬ル萩龍昌院ニ位牌アリ

晦日魚鳥菜蔬賣出ノ期ヲ定ム令文略徳川實紀

同日頭人津田市右衛門ニ時服一銀十五枚檢使堀八郎兵衛ニ時服一銀七枚藤井治右

衛門ニ時服一金五兩山口代官鷲頭小右衛門ニ時服二山縣市郎兵衛ニ銀二枚下付氷

上山東照宮再築工事竣成ニツキ慰勞ノ爲メナリ

七月八日兒玉與右衛門毛利五郎左衛門御城御番數年勤務臨時命令ノ職務精勤ニ因
リ各米五俵下付

十五日大目付回狀左ノ如シ

此度武家方陸尺共大勢令一同葺屋町芝居へ押込あはれ 公儀を不憚仕方重々
不届付夫々御仕置申付候向後陸尺共は勿論其外ねたり事申あはれ候もの有之
は奉行所へ召連可出若手に餘り候は、早々可訴出捕方遣召捕可遂吟味此旨町
中可觸知者也

右之通町中へ相觸候間可被得其意候

七月

十八日頻年凶荒諸臣皆困苦ニヨリ今來年間祿高百石ニ十二石懸ヲ給與セラル黒印
令條及老臣添書馳走出米段分等左ノ如シ

家來中年來勝手向差闊逮至極候由連々聞届種々方便を以兩年馳走の出米差返候
然共元來不足の所帶數十年出米の餘力を以自他國の入用漸相達來候得共家中の

困窮難差置右之通に候依之大坂表借銀相滯其上去在府の内重き不意の造佐入差
湊且米紙段々下直相成至當年彌以借銀の繰巻難相成に付而今來年中は差向儀を
も大概相止候心得に至極儉約の沙汰申付候ても借銀の繰巻差闊此上各別の吟味
無之故當暮より馳走の出米申付候間相もなく又々馳走を請候儀心外の事候得共
無據申付候間家來大小身共に此旨相心得諸事儉約を盡し奉公の悟覺有へし委細
年寄共より申聞すへき者也

寛保二年七月十八日 御黒印

覺

御所帶御逼迫に付年來御家來中御馳走出米を以て御取續相成來候へ共困窮至極
之段連々被 聽召上一ヶ年成とも御救被遣度御思召の旨を以御仕組被仰付去々
年御馳走米被差返猶又去年も引續右之通に付兩年御借銀御返濟相滯其上去 御
在府の内不被思召寄重き臨時の御入用彼是差湊且米紙の直段下直に相成大坂御
新借も餘分相増旁至當年差湊御運送米餘石不被差登候ては御借銀繰巻難相成候

へ共各別の御吟味無之に付御家來中今年御馳走高百石付而旅役出米共に十二石別紙の通出米被仰付候段々相續候御借銀の繰卷米紙只今の通の直下にては今來年十四五石宛の御馳走米不被召取候ては行届候様に不相見候へ共來年の儀は米紙直段旁未相極儀第一一兩年重き御馳走被請候様にも難被仰付 御思召に付先當年は最前記候通御馳走被請來年の儀は米紙直段等相極候上何分可被仰出候條可被得其意候年來の困窮御救の無間相又々御馳走被仰付候段御心外に被思召候へ共無據右之通に候然上は今來年の儀は難被聞儀の外は一切御臨時等被差止隨分御儉約被遊儀候間御家來中の儀も大小身共に至極被盡儉約取續の吟味被仕可被遂御馳走候事

附病者幼少並御扶持方成の面々出米の儀古法有之儀に候へ共近年御了簡を以高百石に付現米二石五斗宛増出米被仰付候今年は御馳走出米餘分の儀に付右の半減高百石に付一石二斗五升宛出米被仰付候事
附借銀調方の仕法別紙有之候事

附愁訴願事近年の通被差留其外借銀等願不及御沙汰候事
右被存此旨組支配中へも可被申渡候以上

七月

山	榎	毛	毛	穴
縫	遠	大	筑	志
殿	江	藏	後	廉

御馳走出米段分覺

一高百石以上

但高百石に付現米十二石懸り

一高七十石以上

但高百石に付現米十石七斗懸り

一高五十石以上

但高百石に付現米八石三斗懸り

一高四十石以上

但高百石に付現米六石三斗懸り

一高三十九石九斗九升以下

但高百石に付現米四石六斗懸り

一足輕以下

但現米十石に付二斗七升懸り

一病者幼少並御扶持方成の儀高百石以上の儀は高百石に付一石二斗五升宛高百石以下の儀は夫々の段分辻出米へ右の當りを以増出米被仰付候事

一米銀持合候者は勝手次第銀子にて差出候は、和市の儀は二石替御切錢取の儀は如古法五石和市に被仰付候事

一被石へは出米被差免候事

一寺社家御馳走の儀は惣の當りの内三步二被召上残り三步一被差除候事

一二人扶持計の者へは出米被差免候一人扶持にても切米持合二人扶持より上に相候者の儀は出米被仰付候事

一御雇衆隠居料女中の恩扶持一步引締被遣候事

右當戌の年御家來中より御馳走出米段分右之通候以上

戊七月

覺

一御家來中古借米銀納方の仕法近年の通被仰付候事

一旅役初番手借並百石に付四石宛御貸米代去る午の七月迄の分は調被差延置候午の八月より以後御貸渡の分近年且納被仰付候處此度御仕組に付當七月廿九日迄御貸渡の分は整被差延候事

一幕々小身通へ對し被差出候操卷銀去る申の暮分去る酉の暮分孰も利無二ヶ年

整被仰付筈候處此度御仕組に付去る申の暮且納殘候分をは整被差延去る酉の暮分の儀は當暮より二ヶ年調被仰付候事

一當年兩度の御貸米手取の内を以當暮整被仰付候事
右此度就御仕組諸借調の仕法前書之通被仰付候以上

戊七月

同日益田越中跡職ノ事繁澤勘解由ハ先益田織部實子ニテ先祖牛庵血統ナルニヨリ
越中養子トナシ家督ヲ命シ家祿高一萬千石ノ地ヲ領セシム繁澤勘解由益田越中跡
職相續ニヨリ毛利宮内弟猪之助ヲ繁澤勘解由嫡女ニ婚約繁澤家ヲ繼續セシム

廿三日與夫保人ノ制發令アリ其文畧ス徳川實紀

廿七日看病ノ制發令アリ其文左ノ如シ

一看病斷之儀父母妻子之外は斷不相立候乍然兄弟姊妹伯叔父母其外近續之者難
見放體にて外に可致看病者も無之族は其節相達候上之儀たるへく候

同日當職山内縫殿辭職留任三幅對掛物狩野探綱縹紗三卷下付今來年財政整理氷上山

御宮再築萩城三郭城濠深濶等竣成ノ勞ヲ慰スルナリ

八月九日物頭役國重又右衛門齡七十歳ニ達シ辭職ニヨリ銀三十枚書院小性國司六

郎右衛門數年勤務辭職ニヨリ遺小袖一板本九郎兵衛使番物頭再勤辭職ニヨリ召下

上下馬來源太夫物頭再役苦勞ニヨリ召下上下下付

十一日福原少輔三郎先祖出羽守貞俊百五十回忌ニツキ香奠銀三枚下付

同日御鷹方和智六郎兵衛五十一年勤務ニヨリ銀七枚下付

十二日手回頭内藤與三右衛門老中ニ任シ大頭役ヲ命ス宍道式部ニ手回頭ヲ命ス福

原貞右衛門城代役ヲ免シ宍戸大學ニ後任ヲ命ス柳澤新右衛門宍道式部代リ大組頭

ヲ井原圖書ニ梨羽頼母代大組頭ヲ佐世雅樂ニ兒玉三郎右衛門代リ大組頭ヲ命ス貞

右衛門頼母三郎右衛門ニ羽織下付粟屋帶刀ノ大頭役ヲ免ス

廿二日毛利宮内ヨリ同姓宇右衛門遺物トシテ唐金香爐一箱ヲ獻ス

廿六日楳杜六郎大組頭ヲ免シ桂式部ニ後任ヲ命ス六郎ニ羽織下付赤木藤右衛門赤

間關在番役ヲ免ス

九月八日毛利彦次郎開作地前大津深川村ノ内ニテ山野共五十町餘寛文八年免許ノ
内生田猪右衛門吉見家ニ重キ由緒アリ殊ニ伊勢代家政用務ヲ依頼シタルヲ以テ伊

勢遣言モアリ開作地四町六反四畝十九步猪右衛門へ分與ノ請願ヲ免シ檢地石盛ノ後猪右衛門本知へ引加フヘキトノ命令アリ

十四日兒玉平馬ニ右筆副ヲ命ス

十五日大目付同狀左ノ如シ

此度關東水損之所へ米穀行届候様に有度儀候間損毛無之國々より商人の米穀勝手次第相廻商買候様に領主並地頭より領下の商人へ可被申付候
右之趣可被相觸候

同日公萩發駕國內巡撫阿武玖珂熊毛都濃佐波吉敷厚狹豊浦大津ヲ經過十月四日還城所在賞賜セラル、高壽百歳以上六人孝子善人九十人恤救ノ鰥寡窮民二十八人皆鳥目若干文ヲ賜フ有差蓋シ古來ヨリ入國ノ初巡撫恩邸爲例然ルニ享保十七年以來凶荒陸續是以テ延滞今日ニ至レリ

十月六日開老連署ノ書アリ之ヲ萩城ニ達ス十七日也上州利根川堤防修築ノ助役ヲ命セラル蓋本年八月大風雨洪水堤防ヲ破崩スル長數十里ニ及ヘリ今回吾藩ニ命ス

ル所長凡二十三里武州旆羅榛澤兩郡ヨリ上州新田郡ニ至ル吉川氏亦奉書左ノ如シ
吉川左京助役ニ對スル奉書アリ略ス

關東筋出水付て御料私領共川々普請所御手傳其方へ被仰付候間可被存其趣候尤此節不及參府候恐々謹言

十月六日

本多中務大輔

松平伊豆守

松平左近將監

松平大膳太夫殿

關東筋川々普請所御手傳人名左ノ如シ

松平大炊頭

松平大膳太夫

吉川左京

細川越中守

藤堂和泉守

阿部伊勢守

仙波越前守

京橋佐渡守

伊東熊太郎

稻葉萬次郎

問部若狹守

右之通被仰付候間可被得其意候御勘定奉行神尾若狹守水野對馬守可被相談候且
又右御用之儀左近將監へ可被申聞候尤此段吉川左京へも可被達候

此外助役ニ關シ奉書諸書付等數通アリ畧シテ載セス(上利根川御普請御手傳事)

惣奉行毛利筑後本年江戸副奉行清水長左衛門十一月二十六日江戸ヲ發シ二十七日

修築地ニ至ル監察物頭檢使諸吏員百餘人順次出役吉川氏ヨリ奉行宮庄圖書粟屋縫

殿等亦數十人出役二十九日起工翌年三月二十八日ニ至テ竣功青雲公代元祿十六年

命アリ總費用二千九百八十四貫目ナリ

七日用所役厚母惣左衛門右筆羽仁五郎左衛門死去

十二日尾寺長左衛門ニ用所役ヲ命ス

廿八日今回奉命ノ利根川修築費金巨大於是諸臣皆議シテ祿高百石ニ十二石掛ノ上
更ニ一石米ヲ加へ出米センコトヲ乞フ之ヲ許サル

御意之覺

今度關東筋出水に付御普請御手傳之儀被仰出御本望被思召候此時之儀候間何と
そ首尾能相濟候様にと被思召候然者兼而御所帶御差詰之御時節被差問候段相考
御家來中遂御馳走度之由願出候通當役中より申上之神妙之至 御祝着被思召候
年來御不勝手に付無據出米之儀當夏被仰出候上猶又被請御馳走候段別而 御氣
毒被思召候得共各別之御仕組も無之誠大切之御時節に候へは彌御家來中よりも
被請御馳走之外無之候然共當年之儀は暮に差懸り一入迷惑之儀に付而先少々の
増御馳走被仰付候委細之儀は年寄共より可申聞旨候事

考臣添書

今度關東御普請御手傳御奉公に付御家來中御馳走之願被申出候趣達 御聞御祝
着に被思召一同に 御意被成候然者此度之儀は御大切の御國役尤莫大の御入用
至極御差問之段は考之前に候御手傳に付ては御先格も有之事候得共先達而多分
の御馳走被仰懸殊時節柄暮に差懸り候儀に付以御了簡先今年は高百石に付米一

石宛増出米被仰付候至來暮は重く御馳走被請にて可有之候間面々此旨被相心得
大小身ともに取續の覺悟被仕被遂御馳走候儀此時之可爲御奉公候來暮出米の員
數は至來暮可被仰出候間可被得其意候然上は御儉約之儀猶々諸事吟味被仰付新
規之儀は不及申無據儀にても可相成程は被差置事候間御家來中大小身共右之趣
致吟味候儀可爲肝要候事

附病者幼少並御扶持方成之面々此度の御馳走一石に對し増出米の儀高百石に
付米一斗四合宛被召上候事
右被存此旨組支配中へも可被申渡候以上

戊十月廿八日

山 縫 殿
榎 遠 江
毛 大 藏
毛 筑 後
穴 志 庫

御馳走出米段分覺

- 一 高百石以上
但高百石に付現米一石懸
- 一 同七十石以上
但高百石に付現米八斗九升懸
- 一 同五十石以上
但高百石に付現米六斗九升懸
- 一 同四十石以上
但高百石に付現米五斗二升懸
- 一 同三十九石九斗九升以下
但高百石に付現米三斗八升懸
- 一 足輕以下
但現米十石に付二升懸

一病者幼少並御扶持方成之儀は高百石に付一斗四合宛百石以下の儀は夫々段分
辻の出米右の當りを以増出米被仰付候事

一米銀持合の者は勝手次第銀子にて差出候は、和市の儀は二石替御切錢は如古
法五石和市被仰付候事

一被石分は出米被差免候事

一寺社家御馳走の儀は惣之當りの内三步二被召上殘三步一被差除候事

一二人扶持計の者へは出米被差除候一人扶持にても切米持合二人扶持より上に
當り候者の儀は出米被仰付候事

一御雇衆隠居料女中恩扶持の儀は此度の増出米へ對し候ては歩引被差除候事

右今度江戸破損所御普請御手傳就被仰付増出米段分右之通被仰付候事

戊十月

同日毛利筑後廣政享保九年ヨリ同十四年ニ至ル當職役中算用一紙公聽ニ達ス左ノ
如シ

覺

一惣高二百七十三萬九千五百二十一石五升

内

七百七十五石八斗二升

新開

右之物成

米七十八萬四千八百六十四石三斗二升

銀二萬九千四百六十九貫七百八十五匁

内拂

米七十七萬千七百四十石六斗六升

銀二萬六千三十貫七百五十三匁

殘

米一萬二千二百二十三石六斗六升

銀三千四百三十九貫三十二匁

右御貸付米銀共後任當職堅田安房へ引渡

日不詳後房取締ニ關シ江戸老臣訓示左ノ如シ

條々

一兼て被差出置候御奥御殿御箇條之旨今以相違無之候條堅相守候儀肝要之事

一火用心別而念を入夜中長局女中火之廻り於御奥番組を定置可被差廻候事

一高須五左衛門總川彌右衛門事定詰にて泊番之儀は一人宛格番に可被仕候事

附上下鎖前締り符之儀は泊番より符印可被仕候且又御鈴廊下其外惣之締り

々々符之儀は兩人相符に可被致候事

一御在府中御表より御膳廻り候節は溜り之間御飯臺場相詰尤爲締御すへ御膳場

をも見合可被申候事

附筆者役小檢使兼役之儀候條御膳廻り候節は御すへ相詰締り旁見分可仕候

御客等之節も勿論に候事

一御在府年には年始歳暮五節句正御誕生御祭此外御祝ひ日前々之通御祝ひ御居

り被遊候節は御嘉例無相違可有沙汰候事

但御獻立度々御表つばね岡野間へ披見に入可被申候事

附御留守年にも右之度々御居り之御祝ひ調御奥差上候様に沙汰之事

一御膳廻り候は、鬼喰五左衛門彌右衛門兩人へ代るゝ被仰付候事

一法林院様心涼院様被爲入候節は御馳走之次第御表より可被仰出候此方よりも

氣付候儀は相伺尤御臺所頭人へも乞合何分御馳走之仕構可有之候事

但御留守年に被爲入候節は唯今迄之御仕法も有之候間相違有之間敷候御獻

立之儀は被爲入候上御裏年寄迄差出其上にて御醫師女中見合可相成候鬼喰

兩人間可被仕候事

附御留守年に御表へ被爲入候節は御留守居方へ申達乞合之上可被遊御出候

御留守居御廊下鎖前迄被罷出候通申來候上御表局岡野間へ其段申達兩女

中之内御表使同道にて御廊下罷出猶又御留守居方乞合之上御表使符を切

御出被成其段御表使兩人へ可相届候御奥へ被成御歸候節は御表使先鎖を

締置可申候以後之締り之儀候間女中方乞合御間相次第早速兩人御表使同道にて鎖前へ参り相符可被致候事

一法林院様心涼院様被爲入候節一人御玄關より御通輿之御跡を参り御廊下御廣間通り中程にて控可被申候御歸の節御送りも右之通に候夜に入被遊御歸候節は御手燭灯御輿の御先へ可参候事

一御奥御殿付侍中御無人の儀に付四人共に定詰に被仰付候二人宛泊番をも被仰付候事

附八時には孰も下宿別而御無人に付締り如何に候間二人宛は可相詰候八ッ

時計打候は、唯今迄の通女中又半下たり共鎖前の外へ一切出し申間敷候自然無據子細於有之は理りの筋兩人間承届可差免候然共八ッ以後は諸商買人一向不相成候間いつれへ尋來候とも不及申次中口より差返可申候事

一中の口不寝番只今迄之通中の口番は板之間のもの廻しにして相勤候様可申付候事

一御中間其以下に至迄御無人の儀候間非番不被仰付候然共御用無の節は休息も可仕候兼而非番の申立仕せ間敷候事

一御在府年に御膳廻り其外御客等の節は御表より定りの役人中御すへまで可参候左様の節は別而行規作法能締り可被申付候女中よりあいそへと候て給物一切差出候儀堅無用に候何そ被下候筋有之候は、諸士中は於御廣敷可被遣候其以下へは御臺所にて被下候様被仰付候事

一御奥付諸士中御門外罷出候儀就御用罷出候は、御奥御用印を以可被差出候自用にて他出の節は五左衛門彌右衛門印判の切手にて其日泊番に當り候者より差出候様被仰付候事

一御所帯向勘定事金銀當座拂其外諸沙汰印判の儀は兩人自分印判にて可相濟候勘定統一紙並肩印物は御奥御用印に被仰付候間肩印には御用印突可被申候事
一御奥締り鎖前出入等の儀兼而被差出置候御書付の通候諸士中たりとも兩人間より差圖無之候は、御茶間へ参候儀堅停止に候諸士中へは誓紙被仰付御中間

以下へは請狀申付置候由猶又於御奥別紙定置候書付も有之通に候條第一男女の差別就中相嗜萬端亂かましき儀無之様に可得心候御留守年には鎖前夜五ツ時には締可申候事

一御奥女中病氣の時は飯田道立へ見合被仰付鍼醫の儀は大枝圭甫へ被仰付候道立罷出候儀御中屋敷へも兼而御沙汰相成居候間御用の節は御裏年寄迄兩人より可被申達候惣女中病氣の時分は道立に不限事候間締り能沙汰にて御番醫へ見合被仰付候ても可相濟候事

但御側以上の病氣にて道立圭甫部屋々々へ參候節は兩人の内一人御表使同道にて可被參候其以下の病人に付圭甫參候節は御道具方役人の内一人御表使同道可被申付候且又御番醫師參候節は兩人の内一人御表使同道にて可被參候事

一御奥惣人數出入の儀は御奥切手門より往來被仰付御本門をは締置尤法林院様心涼院様御出被成候節計は御本門明させ御往來被成候其節は前々の通御中間

頭罷出候様被仰付候事

附切手締り仕法前々の通被仰付候事

一御奥御無人の儀に付御表局事日々御奥被罷出惣の締り旁見合指引仕岡野申合候様に御つほねへも御沙汰相成候事

一岡野事御奥諸事引請締り仕御表局被申談惣女中差引仕無據儀有之下宿の節は御局へ乞合御局出被居候上にて岡野下宿候様にと岡野へも御沙汰相成候事

一御奥御座敷廻り並御庭廻り取繕掃除等有之作事のもの其外にても入候時は御奥乞合女中の方仕廻かこひ等出來候上兩人間一人御道具方役人の内同道にて

召連可參候尤御掃除の儀は御奥付番のもの板の間のものに限り可被申付候事

一御煤掃の儀は御在府年には申窺可有沙汰候御留守年御歳男被差出候は、兩人間同道にて上鎖前より通し御上段御三之間にて老女中出會御煤竹にて御上段

御掃始相成於御三之間老女中相對御熨斗被下御煤御嘉例は上の御使者の間に可被下候御奥御座之間は女中捌たるへき事

附御歳男被召出候度數御煤掃節分御飴掛正月御掃初御飾休の節被召出候事
一 女中被召抱候へは御側女中は親類書に人主印形御次以下は請狀被仰付候孰も
只今迄の案文の通可被申付候事

附被召抱候女中へ誓紙被仰付候不意の儀にて御暇被下候得は返り誓紙被仰
付候様可有沙汰候事

一 自然近火の節惣女中火除の儀も可有之候兼而定被置候相印の頭巾を着せ用心
乗物一挺兼而致沙汰置可被申候左候而兩人間一人泊番の内より同道有之御道
具方一人筆者役一人同道並御中間以下二三人も召連可申候方角次第に麻布御
屋鋪其外にても風上障無之方へ除萬端締り能可仕候御殿中締り御道具始末役
人配り旁仕法兼而調置可申候且又夜中にて候は、御紋高挑灯目印に仕晝にて
候は、兩人間の鍵御定の印を目當に仕可然候事

附大枝圭甫同道にて一所に除可申候事

一 於御奥年中御祈禱の儀正五九月に圓明院被召出於御上段仁王經執行可被仰付

候其外にては極月二十八九日頃に大歳越の御祈禱圓明院被召出執行可被仰付
候事

附四季土用御竈清め神明神主西東兵部少輔へ申遣社人被召出只今迄の通被
仰付候事

役人中勤方兼役之次第

御道具方 二人

但勤方唯今迄御被官の通に凡相心得符前等女中其外出入の締り無緩仕法
の通可届筋の儀は時々兩人間へ相達可請差圖候且又御銀子方御買物方時
計之方兼役被仰付候事

御算用方 一人

但勤方御無人の儀候條御道具方障候節は加番其外共に申合可遂其節候處
茶方兼役被仰付候事

筆者役小檢使 一人

但勤方右同断人造ひをも兼役被仰付候事

御膳夫 一人

但御膳夫被差置候へは御算用方御規式方積り方をも兼役被仰付候事

右之通に心得可相勤候御無人の儀候條孰も申談御間を合萬端締り能御儉約の御時節候間御費無之様可令心遣候事

一頭人御門外罷出候儀は御表局岡野兩人間へ乞合御用無之節他出可仕候尤兩人一同に罷出候儀無用に候事

附御無人の儀候間風烈日には諸士中其以下たりとも他出堅無用に候御用たりとも可成程は延引可申候事

右此先御奥仕法前書之通被仰付候條無相違様に可有沙汰候各御役入代りの節は後役へ此仕法書相渡委細可被申傳候事

寛保二戊年十月

榎 遠 江
毛 筑 後

十一月八日益田越中亡父越中遺物トシテ軸物一幅探幽信筆合作獻納セリ

十二日出雲大社兩國造千家北島ヨリ大社造營ニツキ吉例ニ依リ銅鳥居寄附ノ件使者千

家内記ヲ萩へ遣シ請願書ヲ提出セリ近年財政困難今回關東筋川々水損助役命セラレシヲ以テ納容セラレヌ千家内記ヨリ提出書ハ左ノ如シ

覺

一大社造營之儀は從往古修覆と申儀不相成社例に御座候右の外遷宮と申儀無御座造營の度々古殿より新殿へ奉遷營候就夫宮床も度々に替申候御事

一造營の度々鳥居共に立替申儀御座候へ共御家様より御寄附の鳥居は銅にて御座候故其時々見合に場所遷替は格別幾年共其分に立置申候御事

一此度も不相替鳥居御寄進被爲進被下候へは本社の正面に立只今迄立居候正面の鳥居は馬場の正面に遷し申候御事

一鳥居古來より立來候場所四ヶ所にて御座候内二ヶ所は兩度御寄進被爲遊候銅鳥居にて御座候残り二ヶ所は木鳥居にて朽申候故只今は無御座候御事

一天正年中造營の節 輝元卿様より御寄進被爲遊候銅の鳥居本社の面荒垣の入口に御座候于今至損も不相見候併百五十年餘經候故少々傾申候尤鳥居がくづか杯の包銅少損申候御事

一寛文中從 網廣卿様御寄附被爲遊候銅鳥居本社の正面に御座候少も損不申候御事

戊十一月六日

千家内記

輝元公網廣公寄附銅鳥居寸法明細書アリ略ス寛保二戊三亥諸事小々記録

十五日當役榎本遠江元久老齡ニヨリ絹布ノ下着ヲ許シ黄羽二重二匹下付

晦日御藏元御米方安富七郎左衛門伊藤吉左衛門山代裁判ヨリ收納替女座頭扶持方米二十四石一斗三升三合餘請落米アリ計算上不足ヲ生シタルニ因リ減知隠居ヲ命ス

十二月五日杉岡市左衛門草刈新左衛門宇田川夫人被官在勤中御納戸金紛失ニツキ入獄ノ後市左衛門給米沒收新左衛門流刑ニ處セラル

九日石部六右衛門ニ矢倉頭人ヲ命ス

十四日河瀬五郎右衛門ニ熊毛郡代官ヲ命ス

十九日國內春來洪水風雨等ノ爲メ被害景況幕府報告概略左ノ如シ

一高一萬八千八百四十石餘

一藏二十七所

一倒木百三十八本

一倒家五十一軒

一高札場六所

一番所六所

一橋損四十二所

一獵船三艘

一溺死六人

廿六日山田宇兵衛目付役ヲ免シ物頭役伊藤喜右衛門ニ目付役ヲ命ス

廿七日宮崎八幡へ訓示左ノ如シ

宮崎八幡

右藝州以來護摩宗源之御祈禱例年正五九月執行被仰付候處其後中絶仕候然處吉屋主計享保六年護摩宗源傳授仕候付宗源行事をは毎歲正月計執行被仰付候八月の儀は御祭月に付八月計護摩執行被仰付候御當御鎮守殊御氏神の儀に候條春日社同様に正五九月護摩宗源御祈禱執行被仰付被下候様にと主計より申出候へ共其段は不逮御沙汰候御氏神の儀に付來正月計於宮崎護摩御祈禱執行被仰付候事但正月宗源御祈禱被仰付八月護摩執行の儀は只今迄の通自今無相違候事

廿八日粟屋勘兵衛寺社奉行十二年裏判役五年勤績ニツキ召下羽織下付
廿九日萩兼帶端坊寺社山伏御目見仕法足輕以下勤功相續一代士履謁見ニ關シ訓示左ノ如シ

萩兼帶 端坊

右防長御兩國へ道場建置候儀は九州表數多の末寺就有之折々罷下門下の支配仕

候に付 元就様御代於山口屋敷拜領被仰付道場建置候成就の上 御直判の御制札被遣之其格を以當役中代々之制札所持仕候且又端坊十世明念事 隆景様御懇意に被成段々御用に立候廉も有之於本山も院家内陣同格にて御門跡一家の御仕成に付て限有時分は御門主同座の勤行相勤候寺格にて御座候中西國於十七箇國末派千箇寺餘支配他に並も無之候條年始獨立の 御目見被仰付被下候様にと願出候御國法に付ては端坊の儀も諸事の沙汰筋明圓寺光明坊同格にて全各別の筋無之候へ共身柄京都在住に付折節萩罷下候節は京都端坊の見渡を以献上物被仰付不時に 御目見被仰付來候第一端坊身柄於本山之仕成宜敷各別の譯有之御當家へ對し重き御由緒有之儀旁に付段々御僉議有之候處端坊年始 御目見の儀は毎年罷出にても無之年始の 御目見稀の事に付旁京都より不時に罷下候見渡を以獨立の 御目見被仰付候事

寺社山伏御目見仕法

一萩内寺社家之儀は直觸の外にても年始歳暮共に御祝儀申上候間只今迄之通御

在國年には不相替 御目見可被仰付候事

一在々寺社直觸之分は年始歳暮の御祝儀申上候間只今迄之通御在國年には不相替御目見可被仰付候事

但在方直觸之外山口龍福寺の儀は着座之 御目見にて候條只今迄之通不相替 御目見可被仰付候事

一在々直觸之外之寺社家山伏只今迄年始 御目見に罷出候分向後二つに分格年に 御目見に罷出候様に被仰付候事

但只今迄 御目見不仕寺院社家共に理之趣有之自今以後 御目見被差免候節は是以格年に 御目見に可罷出候事

右御國中寺社家只今 御目見に罷出候分數百人有之猶追々願申出重き由緒有之寺社家は新規にも 御目見被差免候付只様多人數に相成御規式も隙とり難相濟候に付在々寺院社家山伏直觸之外者向後御在國年格年に 御目見被仰付候條前

書之趣を以可有沙汰候事

戊十二月廿九日

足輕以下勤功相積立身可被仰付者共近年明跡之御仕法有之立身不相成其内年齢行暮候者共は存命も難相成體に付以御慈悲其身一代士御雇に被仰付嫡子は素之足輕御中間にて被差置右侍御雇嫡子へは引續不申様に被仰付置候段彌以無相違候然處に御雇の儀は一切 御目見不被仰付例格に候へ共當春被仰付候一代雇の者共は元來御譜代の御家人勤功相積候に付御譜代の士に立身被仰付筈に候へ共明跡無之逮延引候て一代御雇の士格に被仰付置候事に付前々より有來候御雇とは其品替り曾而同様の筋に無之候依之向後年始一度宛は 御目見被仰付御祝儀申上御流をも頂戴可被仰付候事

但嫡子之儀は只今迄の通足輕御中間の本體にて罷居候段勿論に候事

同日江戸加判毛利筑後乘與ノ件國元ヨリ幕府へ乞願セラレシニ許可ヲ與へ替紙ニ及ハス目付へ斷狀提出スヘキ命令アリ年來乘與願公在府中提出セラレ

備考吾藩乘與ノ定員七人ナリ缺員ナケレハ乞願スルヲ得ス是時已ニ免許ヲ得シ

モノ左ノ如シ

家老 毛利 大藏

桂 主 殿

堅 田 安 房

榎 本 遠 江

毛利十一代史卷之六十四

大田報助編次

觀光公記七

寛保三年癸亥正月公萩城ニ在リ

日不詳雇人給銀等ニ關シ訓示左ノ如シ

御參勤御往來御供達は不能申其外御使者等に罷越候節も奴子振相懸聲笠之投相切鬚等堅被差留候此段は前廉も被仰出たる事に候へ共心得違の者も間々有之儀に候條自今彌無相違可被相心得候且又江戸召連候下人の儀奴子振相或は江戸案内功者を申立給銀莫大高直の由相聞候供廻見苦敷無之律派を好み候儀は左様も可有之事に候へ共奴子を撰み又は江戸功者の者を相求候趣に付て左様の人柄はすくなく恩銀をもせり上げ高恩に召抱候故夫に準し惣の奉公人も給銀自然と高く相成御番手の面々一統の迷惑に相成主人の不勝手も彌増御勘渡不足を申立毎

々御世話にも罷成候段甚以不覺悟心得違の事に候一列々々申談急度遂吟味高恩
の人不召抱尤見苦敷無之者相應に召抱候心得に可仕候たとひ只今迄召抱置候下
人たりとも給銀莫大高直の者をは入替可仕候表方は申談内證にて品を付種々に
なぞらへ高恩ニ逢候下人召抱候やうなる儀有之時は被仰出をも相背惣の妨にも
相成事に候條能々勘辨候而早速申談可有其心得候右廉々御目付衆へも御沙汰相
成候間右兩條若不心得の筋も於有之は被逮御沙汰且高恩を貪り候奉公人は猶以
重く可被相答候事

寛保三亥正月

二月五日ヨリ七日ニ至ル壽徳公五十回忌東光寺ニ於テ修セラルル六日ヨリ七日ニ至
ル江戸瑞聖寺ニ於テ法會執行米二十俵銀三十枚納付セラル高野山墓所へ大坂留守
居井上源三郎ヲシテ代拜銀十枚納付セラル正統年回ノトキハ國元ヨリ由緒ノモノ
ヲ代詣セシムル例ナルモ元文五年以來儉政中ニ因リ大坂留守居ニ命令アリ
八日益田越中ニ内藤興三右衛門替リ大頭役ヲ命ス山田五左衛門寺社奉行免シ粟屋

主殿ニ後任ヲ命ス

十五日根來主馬大組頭役ヲ免シ國司内藏ニ後任ヲ命ス主馬ニ羽織一下付
廿日去歲ヨリ利根川修築役費巨大支辨スヘキ道ナシ於是諸臣ニ諭シ俸祿ノ半額ヲ
給與スヘシノ訓令ヲ發ス黒印令條及老臣添書アリ去七月十八日之發令ニ概ネ同一
ナルヲ以テ略ス

同日諸臣扶持方成ニ關シ地江戸老臣訓示左ノ如シ

覺

御家來中御扶持方成の儀無據勝手差詰御斷申出儀に候得は知行御惱に被仰付一
向御奉公をも差止 御目見をも不仕儀當分御家人を離候同前の體に候へは大切
の境容易に御斷可申出儀にて無之其心得肝要の儀に付去る享保十一年嚴密の仕
法被仰出候處其後半知の御馳走以來家督養子縁職を始其外段々御了簡相増只今
迄も右之通にて於今は却而御扶持方成の居方不令連續且は不勝手の筋有之儉約
も難相立自然と心得違の者も有之様に相聞風俗不宜儀も有之由候然共此度重き

御馳走米被仰付候へは下にも勝手可及差岡儀に付御了簡にて去暮以來は數度の御扶持方成をも先被遂御許容候兼而被仰出候通此御時節の儀にて候へは平人にも御扶持方成同前の心得にて可罷暮覺悟勿論の儀御扶持方成衆の儀は猶又尋常の居方心得にては不相澄且御扶持方内造佐入も減可申廉々僉議被仰付左之通被仰出候尤家督養子自身役家續人無之無妻の縁職をは此度も近年の通願出候はは可被差免候事

一 夕方の他出只今迄被差免候得共日の中他出仕候ては衣服等不勝手の廉有之に付自今被差留候無據用事有之候は、夜分他出可有之候事

但隠居は女中十歳以下の子供は前々の通盡の他出制外の事

一 服忌懸り候親類新佛事遠忌等の焼香に晝の内他出上下着用追々被差免候へ共家内の法事は格別他家にては親子の外一切被差留候事

附り佛事として出家衆申入候節家内は格別客の儀は親子兄弟の外申入候儀停止に被仰付候上ヶ法事の齋付可爲同斷

一 四十歳以下の本人並嫡子末子にても爲稽古晝の内他出袴着用被差免四十歳以上の本人にても明倫館講釋承候儀をも被差免候得共只今迄の通にては不勝手の廉有之儀候然は稽古等も漸不及斷絶迄の心得を以一ヶ月三度迄は晝の内他出被差免候尤乗馬の節の外何れへ參候とも可爲中帶事

但乗馬の節計袴着用被差免儀に候得は他の稽古場立寄候ては差別不相立候間一向脇寄不仕直様可有歸宅候若他の稽古場罷越候は、袴を脱可被罷越候且又往來共に脇寄仕候段無用之事

一本門小門有之衆平人も廉有之節計本門を開常は小門を明往來仕候御扶持方に相成候ても其通にては外見居方の差別不相立候間小門をも少し立懸置往來可被仕候尤小門無之衆は大戸を立くゝりよりの往來只今迄の通たるへき事

一 嫡子並娘縁職被差留候事

一 御扶持方成内在郷住宅の願申出太概致在萩又は身分計罷越候も有之由候向後在郷願出被差免候は、家内不殘在郷罷越可被相暮候尤在郷罷居候ても萩同前

の仕法無相違候事

一本末其外近親類吉凶の節上下着用並晝の内罷越候儀被差留候事

一病氣大切の衆爲心添晝の内他出服忌懸り候間柄えは被差免來候得共向後は親子兄弟の外願被差留候事

一他出の節小身の衆大概無僕の心得たるへし分限の衆たりとも若黨不被召連一僕にても被相濟度儀に候幼少女中等若黨被召連候節にても若黨袴着用一切不相成段勿論の事

右御扶持方成の面々前條の通可被相心得候惣而御扶持方成衆の内表方儉約を立候様相見内證は平人同前の居方にて多人數參會の席へ出會又は種々慰の體の儀を催し候者も有之様に相聞甚不心得の儀道理至極を以及困究御扶持方相應の心得有之衆も共に蒙御不審候様有之段傍輩の妨をも仕甚不謂儀に候急度僉議被仰付候間若不心得の面々於有之は可被及御沙汰候此段御目付衆えも被仰渡候以上

亥二月二十日

山 縫 殿

板 遠 江
毛 大 藏
毛 筑 後
宍 志 摩

廿四日菜種運送ニ關シ發令左ノ如シ大目付同狀

國々より菜種大坂表積廻し來候處近年不作故歎大坂表え積廻し候菜種無數成候に付水油高直にて諸人の難儀に有之候間國々にて菜種作り増し大坂表え積廻し可申候

一絞り油致し候國々の内江州尾州勢州三州駿州豆州相州より江戸廻し致し來候分は只今迄の通可積廻攝州兵庫西宮並紀州中國筋四國筋西國筋にて絞り候油江戸表え可令賣買候

右之趣御料は御代官私領は地頭より可觸知者也

二月

廿八日檜崎久右衛門大坂留守居暫役ヲ免ス齡七十歳ニ達スルヲ以テ銀三枚下付
晦日楢山與兵衛發狂自殺親族ヨリ諸願ニ依リ祿高九十八石二斗三升ノ内十七石六
斗八升一合四勺ヲ減シ殘高八十石五斗四升八合六勺嫡子權七へ給與相續ヲ命ス
三月三日益田越中ニ加判役ヲ命ス

五日公萩城發駕

八日内藤半右衛門嫡子源左衛門福原庄次郎ト借米銀ニ關シ葛藤ヲ生シ刀爭ニ及フ
源左衛門家人ヲ放テ流刑ニ處ス庄次郎祿高百五十石沒收父與三左衛門更ニ高百三
十石給與奉仕セシム

廿九日利根川修築工事竣成ニヨリ此日幕府へ上陳セラル御國政再興記所載修築費二千九百八十四貫目

日不詳公東親途次山崎路旅行ニツキ西宮ニ於テ大坂留守居井上源三郎へ召下上下

一具大坂用聞上田三郎左衛門同宗左衛門同長次郎へ召下小袖一宛下付

四月五日修築竣功諸官吏皆江戸ニ歸ル

六日公着府

八日吉川左京室祖母中條殿 耶祖母死去ニヨリ左京へ使者ヲシテ弔書ヲ贈ラル

十四日閣老ノ書到ル明日公及主管吏ヲ大城ニ召ス

十五日公登營將軍父子謁見將軍慰勞ノ言アリ更ニ時服三十ヲ賜フ如例

熨斗目六染袴十八白袴六

又毛利筑後等十三人城内檜ノ間ニ出席閣老監察列座臺命ヲ傳へ賜物左ノ如シ

時服六 白銀五十枚

惣奉行 毛利 後

時服四 白銀三十枚

副奉行 清水長左衛門

時服四 銀二十枚宛

用人 末國與左衛門

公用人

兒玉市之助

井上半右衛門

小笠原仁左衛門

坂九郎左衛門

時服三 銀十枚宛

周田孫兵衛
山縣市郎兵衛

目付

栗屋五郎兵衛
南方又八郎

物頭

檜崎彈右衛門
吉田八右衛門

又吉川左京へ時服六一貳拾五目奉行宮庄圖書ニ白銀二十枚粟屋縫殿ニ銀十枚ヲ賜フ

廿三日公關老各家ヲ訪フ賜品拜謝ノ爲ナリ

廿八日毛利甲斐守匡敬江戸ヲ發ス

閏四月五日江戸留守居益田河内歸國ニツキ召下拾羽織紗綾三卷下付紗綾下賜ハ利

根川助役ニ關シ勤勞ニ因テナリ

八日江戸在勤ノ輩外出歸邸報告及役舍點燈ニ關シ訓示左ノ如シ

在江戸の面々記録所の御用切手或江戸當役聽届書出切手を以御門外罷出候節罷
歸届仕候ものも有之届不仕人柄も有之候御用切手書出切手にて罷出候節御用の
越により夜に入候ても罷歸事に候條自今以後は御屋敷罷歸次第只今罷歸候段時
々江戸當役の御用所筆者役の方え可被相届候事

寛保三亥閏四月

木屋々々の燈火用心爲旁御免の者の外四時以後の燈被差留候然とも病人有之候
歎或四時以後御用有之候時分燈仕候仕法の儀兼而御書付に相見候早天より出勤
又は御使者其外御用有之節夜の内認等の用意不仕候而難叶儀候は、自今以後の
儀は明七ツ時已後は御目付所え届不逮候たとひ右體の用意に燈仕候とも七時よ
り内燈仕候節は其譯御目付所え達し聽届の上燈可被仕候事

寛保三亥閏四月

五月十五日鷹司前内府逝去江戸邸及萩山口三田尻鳴物停止二日間

六月朔日諸大名留守居役ノ遊宴ヲナシ又ハ黨ヲ結ヒ其主人ノ命ニ從ハサルヲ禁戒

一近來諸大名留守居共所々茶屋等にて出會猥成遊興仕由風聞候向後茶屋等にて
の出會は爲相止可被申候主人座敷長屋等にて出會候様に在之可然候且つ虚説
ケ間敷儀を申觸候沙汰も有之候此段別而如何成儀候條左様無之様堅く可被申
付候將亦組合仲間一統の様に相成主人も取扱にくきやうにも有之由ケ様之儀
は猶更爲致被申間敷事候間前條の趣をも向後無之様に入念急度可被申付候以
來如何の儀在之候は、主人可爲不念候

同日長府領一里塚從來生木ヲ目標トセシニ本藩ノ如ク塚木ニ改正里程ヲ記載セシ

七日分銅検査ニ關シ發令左ノ如シ大目付同狀

金銀掛合候分銅寛文中改以前の古分銅兩替仲間にて遣候由相聞候付京大坂堺近
郷の分潰等迄外にて賣買不致潰直段を以後藤四郎兵衛方え買請させ目輕き古分
銅内々にて賣買致間敷旨度々相觸候處今以西國並長崎筋にては古き分銅多く賣
買いたし用候由相聞候此已後内々にて賣買いたし候儀は勿論不隱置四郎兵衛方
え可相渡候尤四郎兵衛方より分銅改役人相廻り紛敷分銅は取上等候其趣急度可
相守也

右之通御領は御代官私領は地頭より可被相觸候以上

亥六月

八日橋上水普請ニ關シ大島織衛御領手入ヨリ交付書付左ノ如シ

先達而相達候諸大名留守居共武士方組合橋上水普請等の節其懸りの留守居共取
計不埒の沙汰有之候實事に候得は以外の外の事に候間急度相止候様可被申付候
廿四日ヨリ二十五日ニ至ル香善院宗廟女堂公息一周忌天徳寺ニ於テ法會修セラル金三
十兩納付

廿五日大目付同狀左ノ如シ

近き比小盗など致し候者有之由候間屋敷の近邊にて右體うろん成者見懸候は、
早速召捕之月番の町奉行所え可差遣候捕違ひ候分不苦候

六月

廿六日豊田平四郎公天德寺佛詣ノトキ途次新橋筋ニ於テ不敬ノ行爲アリ逼塞ヲ命
ス

七月朔日鶴飼新左衛門在郷住宅内御扶持方先大津郡黄波戸今御崎沖ニ於テ暴風ニ逢ヒ破船
溺死セリ石原九郎兵衛ノ例ニ因リ嫡子六左衛門ニ跡職ヲ命ス

三日志道隼人ニ大組頭國司内藏後任ヲ命ス

九日吉川左京參府十二月九日歸邑

十三日吉元公側室宗廣公實母惟元女止以萩ニ於テ卒ス龍昌院ニ葬ル法名永昌院

十五日裏判役粟屋勘兵衛死ス

廿五日堅田安房死去嫡子内記へ香奠銀二枚下付

八月九日權衛檢點之制發令左ノ如シ大目付同狀

諸秤之儀古來より守隨彦太郎役人相廻り相改候處近年は私事ノ様に心得候哉
諸秤數多致所持候ものも秤少々出し見せ不宜秤は隠置或は秤所持不致旨を申

改請さる者も有之様に相聞候前以相觸候通守隨諸秤不隠置不殘出し改請候様
可致候尤紛敷秤は取上げ候筈に候此旨急度可相守者也

右之越東海道東山道北陸道並丹波丹後但馬都合三十三ヶ國御料は御代官私領
は地頭より可被相觸候

右之通可被相觸候

八月

十二日驛路之制發令左ノ如シ大目付同狀

惣而道中往來之面々諸荷物定の外重き荷物附通り不申筈候處日光道中奥州道
中往來の諸荷物定の外重き荷物附送り候も有之旨相聞候依之右道中筋えも東
海道之通武州千住宿野州宇都宮宿におゐて荷物貫目相改候筈候間可被得其意候

八月

右之通可被相觸候

十三日暴風萩地附近尤激烈家屋ヲ顛倒スルモノ若干祿高百石ニ銀五十目ヲ度トシ

貸與修理ノ料トセシム毛利氏譜錄

九月二日手回頭内藤與三右衛門死去嫡子式部へ香奠銀二枚下付

十二日ヨリ十三日ニ至ル泰桓公十三回忌瑞聖寺ニ於テ法會修セラル銀五十枚米二十俵納付十一日ヨリ十三日ニ至ル東光寺ニ於テ法會執行高野山安養院へ大坂檢使

粟屋權兵衛ヲシテ代詣セシム

十三日毛利大藏死去年七十二嫡子伯耆へ香奠銀三枚下付

日不詳御留守手回頭宍道式部家計逼迫ニツキ辭職ヲ乞フ奉職間モナク又西御殿用

務ヲモ命セラレタルニ因リ引田成同一ノ仕法ヲ以テ留任ヲ命ス

廿二日潰銀賣買之制發令左ノ如シ大目付同狀

櫛笄に銀がなく類用候儀停止の旨先達而相觸候上は右銀具の類潰し銀に相成候付不貯置銀座へ賣渡可申候惣而灰吹銀並潰し銀前々より内々にて自由に賣買可致筋に無之潰し銀は銀座え買入候事に候處近來は心得違狠に成候様相聞候古來の通銀座の外他所にて賣買の儀堅令停止候銀道具下銀入用のものは銀座にて可買請候此旨急度可相守者也

右之趣可被相觸候

亥九月

廿七日堅田内記ニ井原孫左衛門後任大組頭役ヲ命ス

十月六日國內去戌十二月當亥二月以來風雨洪水及八月十三日大風雨ノ爲メ被害景況幕府へ報告概略左ノ如シ

一高十三萬五千五百二十石餘

内千百三十四石餘 永荒

一倒家三千四百八十四戸

一藏百九十三軒

一番所四十三軒

一高札場十四所

一寺社百五十六所

一船損四十二艘

一負傷八人 内男五人

一死人十六人 内男七人

一死馬 二匹

一死牛 一匹

此外長府徳山清未領損害アリ之ヲ略ス

同日山田平右衛門ニ上勘頭取役ヲ八谷半左衛門ニ未定方ヲ仁保庄左衛門大多和四郎兵衛ニ藏元檢使役ヲ命ス

八日此日ヨリ毛利甲斐守領内巡視

十二日寄組宍戸六郎知行所奥阿武郡清丸檢地石盛ニ關シ人民騷擾ヲ起シ石州公領へ退去ニ因リ六郎遠慮申告病中假養子請願間ナク病死ニツキ祿高九百三十八石二斗九升四合之内六百石減少殘高三百三十八石二斗九升四合浮米ヲ以テ養子久之助へ給與大組へ加へ領地ハ總テ沒收セララル

同日粟屋主殿ニ裏判役ヲ命ス

廿六日毛利伯耆ニ大藏跡職ヲ命シ知行高六千七百七十五石八斗之地ヲ領セシム

廿八日部屋子及覆面停禁發令左ノ如シ大目付聞狀

近年武士屋敷に輕き奉公人の部屋子と申傍輩にて無之者を差置候其内には外屋敷取込脱落いたし候もの又は奉行所より尋の者も有之右體の者部屋々々に罷在博奕等もいたし候旨相聞候間向後武士方上屋敷下屋敷共に部屋々々遂吟味不召抱者は一切差置申間敷候
一近來面體を隠し候頭巾を拵途中にてかぶり候者數多有之奉行所より尋者に紛敷候間前々より有來候丸頭巾角ミ頭巾の外一切かぶり申間敷候
右之通可被相觸候以上

亥十月

日不詳國內各郡出火燒亡家屋少數ノトキハ幕府ニ報告ヲ要セサル旨當職ヨリ當役へ通牒アリ

十一月五日三丁火消小頭木屋發火ノトキ消防盡力ニ因リ内藤十郎右衛門財滿與左衛門ニ各金五百匹下付能美庄右衛門ニ金三百匹下付

廿三日柿並半右衛門萩當役中ヨリ用務ヲ命シ出府セシム金三百匹下付

十二月九日毛利讃岐守室分姫女子出生於常

同日當職山内縫殿切迫ノ財政整理ニ盡瘁セシニヨリ奉書ヲ以テ金海鼠下付

廿八日作事小屋方木村治右衛門ヲ一代遠近ニ加ヘ用方檢使ヲ命ス

延享元年甲子二月廿九日改元正月公江戸ニ在リ

十三日毛利甲斐守弟多賀之允主水正卒

十八日長門國厚狹郡人民七人大坂ニ於テ履銀ヲ使用シ逮捕セラレ此外不審ノモノ捕縛ノ爲メ大坂ヨリ與力同心國元へ派出吾藩警吏ト共ニ搜索犯人九人捕獲シ大坂へ護送奉行所へ交付セリ

廿六日山代代官木梨彌右衛門ニ京都留守居役ヲ伊藤半左衛門山代代官ヲ命ス

廿九日大目付回狀左ノ如シ

新大橋此節中通計致出來候付本所深川筋出火の節は本所深川に屋敷有之面々は各別其外渡り候者は堅指留候尤本所深川より江戸の方へ相渡り候者は渡り候筈に候此段寄々可被相達置候

正月

二月三日法林夫人吉元公室六十ヲ賀シ連歌ヲ催サレ祝品ノ外鳩杖鶴一箱進セラレ

四日御中屋敷ニ於テ宴祝ヲ開カル

六日江戸邸在勤ノ輩外出ニ關シ訓示左ノ如シ

御番手之面々毎月御寺參詣其外自用にて御門外え罷出候儀兼而御法有之事に候得共春先は風烈敷時節にも罷成候間自用にて御門外へ罷出候節も風立候は、途
中よりも早速可被罷歸候事

但御屋敷より一里の外隔候所えも被罷越候は、其先方を支配所え申置可被罷越候御用有之節の爲に候條其通可被相心得候事

御聞にもおよび申爲に候間何某事自然いつれへ罷越候段時々山縣彌右衛門より當番の御奥番頭え可相達候參先相知居候へは御用有之節呼に差越候様相成儀に候條旁無間違様可被相心得候事

右之通頃日よりは就中風烈敷時節にも罷成候付彼是下の心得緩爲無之改而被仰聞候間初ヶ條の趣をは末々迄能々可被申聞候若此上不心得のもの於有之は品により可被速御沙汰候事

十四日權衡檢點之制發令左ノ如シ大目付回狀

神善四郎秤相用候國々え善四郎方より役人相廻し秤改候節秤數多所持のものも不隠置不殘出し見せ改請候様可致候尤紛敷秤は取上候筈に候此旨急度可相守者也

右之越五畿内山陽道南海道西海道山陰道之内因幡伯耆出雲石見隱岐並壹岐對馬都合三十五ヶ國御料は御代官私領は地頭より可被相觸候

子二月

十六日毛利但馬守ヨリ領地徳山ニ於テ重罪犯人磔刑執行之申報アリ

徳山に於て磔刑を行ひし前例なきも支封とても兩國一統の事故幕府へ申請を要せずとなり

廿九日諸大名惣出仕閣老ヨリ年號延享ト改元ノ旨ヲ傳フ

徳川實紀曰ことし甲子によりて例のことくこの廿一日京にて寛保四年を延享と改元せらるゝよし仰出さる

三月廿四日救米方横山文右衛門山村三左衛門湯川善右衛門所管藏米悪計ヲ以テ窃取セシ科ニヨリ給米沒收死刑ニ行フ田中權左衛門父新兵衛ノ科ニヨリ給米沒收流刑ニ處ス其他關係吏員十一人處罰アリ

四月朔日熊谷帶刀元貞ヲ老中ニ任シ留守居ヲ命ス

五日毛利甲斐守匡敬着府

九日大目付回狀左ノ如シ

當三月中年頃三十餘に相見丈け六尺程有之骨柄辯舌等勝れ候男重さ三十貫目

位之笈の様成箱を脊負右箱の内には刀脇差具足等兵具を入胴金を打候棒を突丹波國桑田郡邊を致徘徊徳川何某と申者にて諸國巡行致し候段申候由に候右體の者罷通候は、其所に留置御料は御代官私領は領主地頭へ申出それより江戸京大坂向寄の奉行所へ可申達候尤見及聞及候は、其段可申出候若隠し置後日に脇より相知れ候は、可爲曲事候
右之通可被相觸候

四月

十一日有地内記物頭大組番頭役等十八年勤務ニヨリ紋章麻上下一具醫員竹田紹慶數年勤務ニツキ紋章羽織下付

十二日狂言師鷲傳右衛門大坂ニ於テ一世狂言開催ニツキ吾藩弟子狂言師貸用ノ請願ヲ許シ山本藤八同彌八江山源兵衛ヲ出坂セシム

十五日公歸國暇ヲ賜フ

十六日當役榎本遠江辭職ヲ乞フ緊要ノ時節且老練ニヨリ留任ヲ命ス

同日公歸國途次京都入之乞願アリシモ病痾ニヨリ入京ヲ止ラレ京都留守居平川長左衛門ヲシテ諸司代牧野備後守へ報告セシム

十八日江戸留守居熊谷帶刀ニ黒印令條ヲ授ク法林夫人裏老小川源右衛門宇田川夫人裏老市川三右衛門毛利甲斐守母性善院裏老三浦七兵衛ニ各黒印令條ヲ授ク皆例文ヲ以テ略

同日乃美仁左衛門ニ手回頭役ヲ命ス

同日山根七郎左衛門者儒嗣子ナシ三田尻船頭山根道之進七郎左衛門甥ニシテ拔群秀才ニツキ養子ノ請願ヲ允シ儒業怠リナカラシム

十九日閣老松平伊豆守死去此日ヨリ三日間鳴物停止公江戸發途一日猶豫セラレ

廿一日江戸留守居熊谷帶刀元文三年以來手回頭手回之組頭等數年勤務ニヨリ裕羽織下付蟻川彌右衛門後房勤務ニヨリ銀十枚下付

廿二日公江戸發駕

廿三日江戸留守居熊谷帶刀乘輿ノ事公在府中幕府へ請ヒテ許可ヲ得誓紙提出例ノ

如シ

五月朔日大坂城代酒井雅樂頭閣老ニ任ヌ使ヲシテ太刀一腰馬代黄金十兩遣ラル

九日松平但馬守直常死去ニツキ大坂檢使栗屋權兵衛ヲ明石へ遣シ香奠銀五枚ヲ贈ラル

十日道奉行依田一學ヨリ日比谷門外下水道浚深ニ關シ書付交付左ノ如シ

日比谷御門外御堀芥多く流入埋申候右は櫻田邊下水吐不宜大雨之節往還え下水溢流行候故と存候依之井伊掃部頭殿屋敷下水より御銘々下水續平日度々浚御申付可被成候以上

右之通御普請奉行被申聞候已上

五月

道奉行

廿一日公歸城益田頼母ヲ歸國禮使トシテ出府セシム

六月朔日大目付回狀左ノ如シ

近來武家より諸物買取金銀貸し渡右品々立物致置返金相滞候得は證文を以願出

候類在之如何之儀に候向後願出候共借金銀同前二季の可爲裁許候間此旨可觸知者也

右之通在方町方え奉行所より相觸候間爲心得寄々可被達候

五月

三日滿願寺へ去秋以來祈禱執行苦勞ニヨリ紗綾三卷下付

同日毛利讃岐守賜暇歸邑スヘキモ病ニヨリ秋期迄滞府請願許可アリ

八日信常此面二宮理源太嫡子雇ニテ小性役儉政解職ニヨリ銀二枚下付

十一日公歸城歩初宮崎社へ參謁スヘキモ服穢ニヨリ當役榎本遠江ヲシテ代拜セ

シム

十五日加判役毛利筑後病ヲ以テ辭職ヲ乞フ許可ヲ與ヘス

十六日古金銀割合通用ニ關シ大目付回狀アリ略ス

此月殿中諸有司伺候ノ席及ヒ老中若年寄ノ所屬ヲ定ム徳川十五代史

老中支配ハ禁裏並公家門跡方ノ事國持大名萬石以下交替ノ寄合大造ノ御普請堂

塔ノ建立知行割異國御用高家留守居大番頭兩卿傳大目付町奉行旗鎗奉行勘定奉
行作事奉行普請奉行遠國奉行遠國役人小普請組支配留守居番伊奈半左衛門勘定
吟味役其他ハ若年寄ノ支配ナリ

七月七日山根傳右衛門内藤半五郎緒方仲助去々年來明倫館皆勤ニヨリ各銀二枚下
付

九日益田隼人内藤式部ニ大組頭役ヲ命ヌ大組頭役柳澤新右衛門井原圖書辭職ニヨ
リ召下羽織下付山村貞右衛門宇野源兵衛書院役辭職ニツキ各銀十枚下付

十一日當職山内縫殿辭職ノ意思アリ留任ヲ命シ協差備前國家守下付

同日大塚勘右衛門外十四人へ水練術公覽ノトキ成績好良ニヨリ金三百匹金二百匹
銀一枚下付アリ

十二日ヨリ十三日ニ至ル龍昌院ニ於テ永昌院一周忌法會ノトキ足輕下座ニ關シ訓
示アリ略

十七日公是日會テ先公近侍ニ奉仕スルモノ十八人亦曩ニ公ニ奉仕シ目今外局ニ轉
任スルモノ十一人ヲ召シ謁見記録所ニ於テ菓子及酒ヲ賜フ蓋公懷舊ノ厚情想ヒ見
ルヘキナリ

先公近侍

中川與右衛門	熊野右中
山中與一兵衛	山中八郎兵衛
氏家矢之助	藏田吉左衛門
馬屋原亘	長崎四郎兵衛
馬屋原彌四郎	寺内彌二右衛門
福原五兵衛	服部七郎左衛門
井上七郎次郎	山縣平右衛門
末近善左衛門	雜賀織江
宮城彦八	井原彦右衛門

公近侍

熊谷彦右衛門

岡惣左衛門

江川平八

三浦忠左衛門

杉孫七郎

栗屋九郎左衛門

井上小兵衛

武藤九右衛門

國司右中

松田小内

信常此面

廿六日帳窮役兼常新兵衛辭職ニヨリ時服二下付十九年勤務ニ因テナリ

廿八日頻年風水災ヲ爲シ關東修築助役アリ國用亦巨大財政ノ艱難不可言然レトモ

大ニ殿室及諸局ノ用ヲ節減シ諸臣祿高ニ十石掛ヲ給セララル黒印令條老臣添書馳走

米段分等左ノ如シ

年來勝手不如意之上去々年關東御普請御手傳に付去年は家中半知の馳走を請る

處去秋の大風國中夥敷損毛兼ての積り令相違至今に至極遠差間猶又無據重き出

米申付の外これなしといへとも去々年以來引續候ての儀救の品も申付度時節別

而心外の儀然とも各別の筋絶方便候付而相續借銀大坂國中其來年え持越尤諸用

堅儉約の吟味を以先當年は馳走の出米員數を減し申付候間面々此旨を存し取續

可遂奉公忝細年寄共より可申聞者也

延享元年七月廿八日 御黒印

老臣添書

去々年關東御普請御手傳に付御家來中より願之筋も有之候へ共去々年の儀は先

達而餘分の御馳走被仰付候付而地道の出來少々被相増去暮に至り相積り候御借

銀爲御返濟半知の出米被仰付候處去秋古今無之大風にて大段の御所務落且御家

來中知行所檢見落米御足石多分の儀次地下出米も取立不相成大坂御運送米莫太

減少其上風損に付御城廻りを始當分難被差置御取繕の御入用御家來中えも右

に付御貸銀被仰付剩至去暮に御家來中至極困究の由に付御貸米被差出在々の儀

も風損にて失食物難被差拾置至當春御貸米波差出被是夥敷御費最初の御積り一

向相違に罷成今暮大坂御國の御差間又々半地の出米被仰付候ても行届不申儀候

尤去る寶永年御普請御手傳の節は御所帶も只今の様には無之時節無之候得共前
廉より御家來餘分の出米打續候上半知已後も又引續重き出米三ヶ年迄被仰付候
既に當時の儀今年も重出來不被仰付候ては大坂御借銀の繰卷難相成種々吟味被
仰付候得共去々年来重く御馳走被請之其上風損旁勝手向至極差悶趣に付後年
は如何様に候とも今年の儀は何とぞ御馳走一先軽く被仰付度御思召にて段々其
吟味被仰付さきく御手相可申段は不相見候へとも大坂御國共に御借銀持越の
積りを以御馳走被減當年は高百石に付旅役米共に現米十石宛の出米被仰付候
上の御差悶の段は下にも考の前に候得共偏に御惠を以右之通被仰付候間大小
身共に愈以被致儉約取續御奉公の覺悟肝要に候事

附借銀調方の仕法別紙に有之候事

附愁訴願事近年之通愈以被差留候事

右被存此旨組支配中えも可被申渡候以上

子七月廿八日

山 縫 殿

板 遠 江
益 越 中
毛 筑 後
突 出 雲

御扶持方成仕法別紙之通被仰出候引田成衆の儀は御仕成格別御沙汰の趣も有之
候得共儉約の心得にも可相成儀に付被相知候との御事

御馳走米段分覺

一高百石以上

但高百石に付現米十石懸り

一高七十石以上

但高百石に付現米九石懸り

一高五十石以上

但高百石に付現米七石五斗懸り